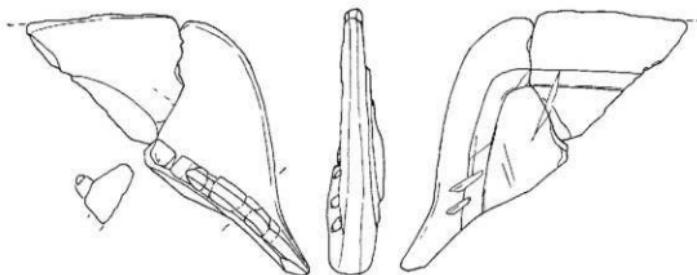


石川県 金沢市

畠田・寺中遺跡IX

- 木曳野遺跡群VII -



平成 26 年 3 月
(2014年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

石川県 金沢市

畠田・寺中遺跡IX

- 木曳野遺跡群VII -

平成26年3月
(2014年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例　　言

1. 本書「**金沢市立文化財センター**」は、石川県金沢市寺中町、金沢西4丁目、桂町地内に所在する事業名：木曳野遺跡群（寺中B遺跡、桂町南遺跡、金沢・寺中遺跡）の発掘調査報告のうち、平成15年度に実施した金沢・寺中遺跡の調査の一部について報告するものである。
2. 本調査は金沢市立文化財センターによる土地区画整理事業に伴い、平成15年度に金沢市立文化財センターが発掘調査を実施したものである。
3. 本報告にかかる現地調査は金沢市立文化財調査委員会（当時：会長橋本澄夫氏、谷内尾晋司氏、垣田修児氏、横山方子氏）の指導の下で、出越茂和（文化財保護課担当所長補佐：当時）、向井裕知（文化財保護課主事：当時）が担当した。
4. 本書の執筆・編集は景山和也（文化財保護課主査）が担当した。写真撮影は遺構を発掘調査担当者が行い、遺物を景山が行った。
5. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 方位は全て座標北である。座標は世界測地系（第VII系）に基づき設定している。
 - (2) 各図の縮尺は、遺物は1/3・1/6、遺構は1/60が主であるが、各図に指示しているとおりである。
 - (3) 遺物実測図の番号は通し番号とし、本文中、観察表、写真図版のそれと一致する。
 - (4) 遺構名の略号は、SB = 捜立柱建物、SE = 井戸跡、SK = 土坑跡、SD = 溝・川跡、SX = 落ち込み・土器だまり跡、P = ピットなどであるが、略号を用いず大河跡とした遺構がある。
 - (5) 土器については「壺」「甕」「高杯」「器台」などと表記するが、用途を示すではなく、形態による分類で、「壺形土器」などの略称である。
 - (6) 土器実測図の断面が黒色のものは須恵器を、その他のものは白抜きで示している。また、実測図内外の目の粗いドットは黒色処理を、細かいものは赤彩処理を、細かな砂目状のものは灯明痕・焼痕を、50%アミ処理のものは漆塗膜を示している。
6. 本調査での出土遺物、記録資料は金沢市立文化財センターで保管している。

畠田・寺中遺跡IX 目次

第1章 調査箇所と報告の内容	1
第1節 調査箇所と既往の報告内容	
第2節 本書の報告について	
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 検出遺構	7
第1節 概要	
第2節 土坑・ピット	
第3節 溝・川	
第4章 遺物	11
第1節 概要	
第2節 土坑・ピット	
第3節 溝・川	
第4節 遺構外	
第5節 補遺	
第5章 樹種同定記録	(株)東都文化財保存研究所 65
第6章 総括	67

写真図版

第1章 調査箇所と報告の内容

第1節 調査箇所と既往の報告内容

今回報告する歟田・寺中遺跡の発掘調査は、金沢市木曳野土地区画整理事業に伴い実施されたもので、事業全体では平成14年度から平成16年度にかけて、約13,760m²の発掘調査が行われている。遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの詳細な経緯は、既刊『木曳野遺跡群I』を参照願いたい(金沢市2006)。

本事業による調査箇所は第1図のとおりである。調査時には、補助事業主体の名称として県費分A～C区、道路名称によって主幹線1～5区、支線部などと呼称して調査を実施している。既刊報告書の報告内容との対応については第1表および第2図のとおりである。

木曳野遺跡群I(以下I、II等とする)では、調査に至る経緯や縮尺1/300、1/100遺構平面図版と共に植生や環境復元、木材・石材利用把握のための自然科学分析結果を掲載している。

IIでは、寺中B遺跡と歟田・寺中遺跡内の桂・寺中遺跡として調査を実施した箇所の調査成果を掲載している。

IIIでは、桂町南遺跡と歟田・寺中遺跡の県費分A～C区の調査成果を掲載している。また、歟田・寺中遺跡の桂・寺中遺跡部分を除いた、縮尺1/500の歟田・寺中遺跡図版が別紙で用意されている。

IVでは、歟田・寺中遺跡の主幹線1区と2区のSD222、SD303(大河跡)の調査成果を掲載している。

Vでは、歟田・寺中遺跡の主幹線3区の調査成果と1区SD222、包含層、2区P20、SD222、SD240、SD244、SD303、4区大河跡出土の墨書き土器を掲載している。

VIでは、歟田・寺中遺跡の主幹線2区における遺構および土器、陶磁器、石製品について報告している。

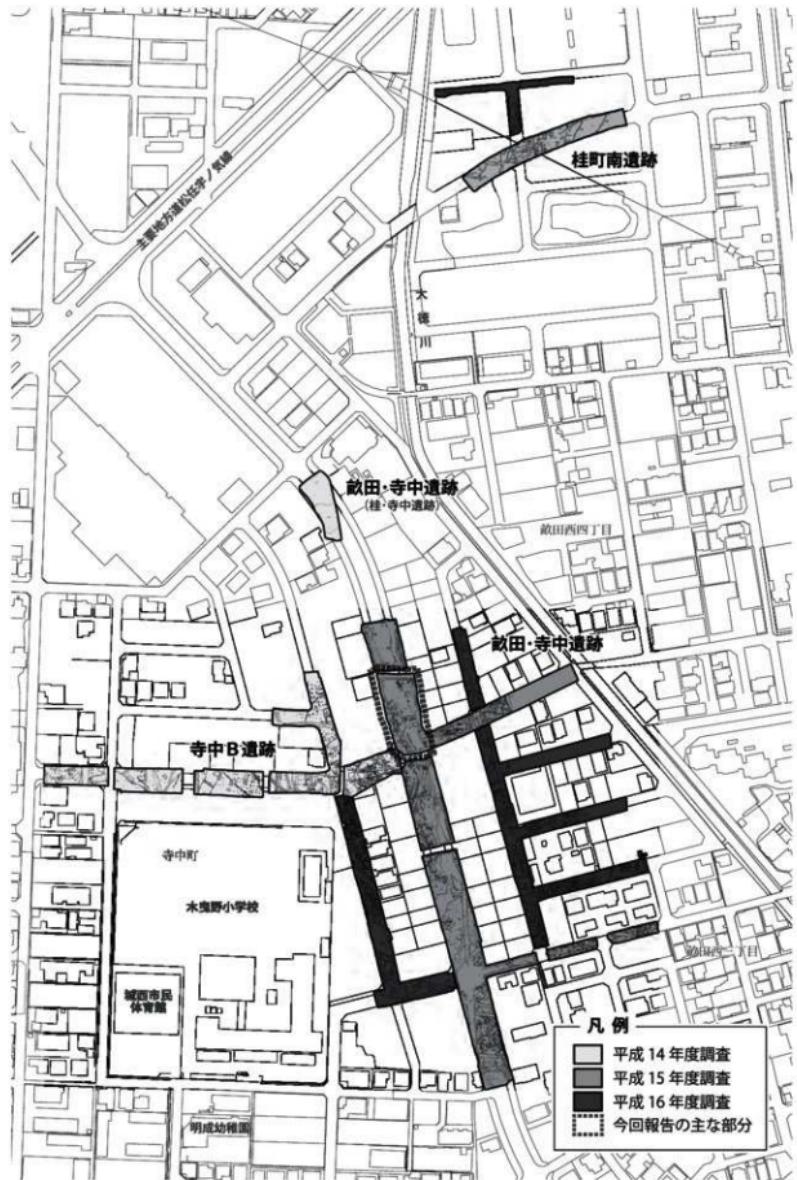
第1表 報告書の内容

記要No	書名	内容	発行年
231	木曳野遺跡群I 寺中B道路Ⅵ 桂町南道路I 歚田・寺中道路Ⅲ	調査に至る経緯・経過、航空測量図版、自然科学分析	2006
239	木曳野遺跡群II 寺中B道路Ⅶ 歚田・寺中道路IV	寺中B道路(報告完) 桂・寺中(歚田・寺中)遺跡	2007
249	木曳野遺跡群III 桂町南道路II 歚田・寺中道路V	桂町南遺跡(報告完) 歚田・寺中道路(県費A・B・C)(K)	2008
259	木曳野遺跡群IV 歚田・寺中道路VI	歚田・寺中道路(主幹線1区-2区SD222、SD303)	2010
279	木曳野遺跡群V 歚田・寺中道路VII	歚田・寺中道路(主幹線3区-2区墨書き土器(1区・4区含))	2012
288	木曳野遺跡群VI 歚田・寺中道路VIII	歚田・寺中道路(主幹線2区土器・陶磁器・石製品)	2013
293	木曳野遺跡群VII 歚田・寺中道路IX	歚田・寺中道路(主幹線4区・主幹線2区木製品・金属製品)	2014

第2節 本書の報告について

第1表および第2図のとおり、寺中B遺跡と桂町南遺跡の報告は終了しているが、調査面積が広く、遺物も大量に出土している歚田・寺中遺跡については、その多くが未報告となっている。これまでに県費分A～C区、主幹線1区、同2区、同3区が報告済みとなっている。本書は主幹線4区の遺構および遺物について報告するものであるが、既刊報告書にて掲載漏れのあった遺物、および木曳野遺跡群VIで掲載できなかった主幹線2区出土の木製品と金属製品についても補遺という形で掲載している。

なお、本書刊行後の未報告範囲は主幹線5区、支線部、西工区、東工区、鉱滓の自然科学分析、樹種同定分析となり、順次刊行していく予定である。



第 1 図 調査区位置図 [S = 1/3,000]

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

畠田・寺中遺跡は石川県金沢市畠田町、寺中町地内に所在する。

石川県は日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられ、金沢市は加賀地方の北部に位置しているが、その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかる。この山地からは市域を西流する浅野川と犀川が流れ、両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金鶴川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は手取川が形成する扇状地の北辺である。

本遺跡は市内の北西部、現在の海岸線からは約2km内陸側に位置しており、周辺は海岸線に沿って南北に延びる内灘砂丘の後背湿地を形成している。また、南側を西流する犀川からの分流が本地域を北流し、北側を西流する大野川へと流れ込むことから、ますます湿潤な環境を形成している。



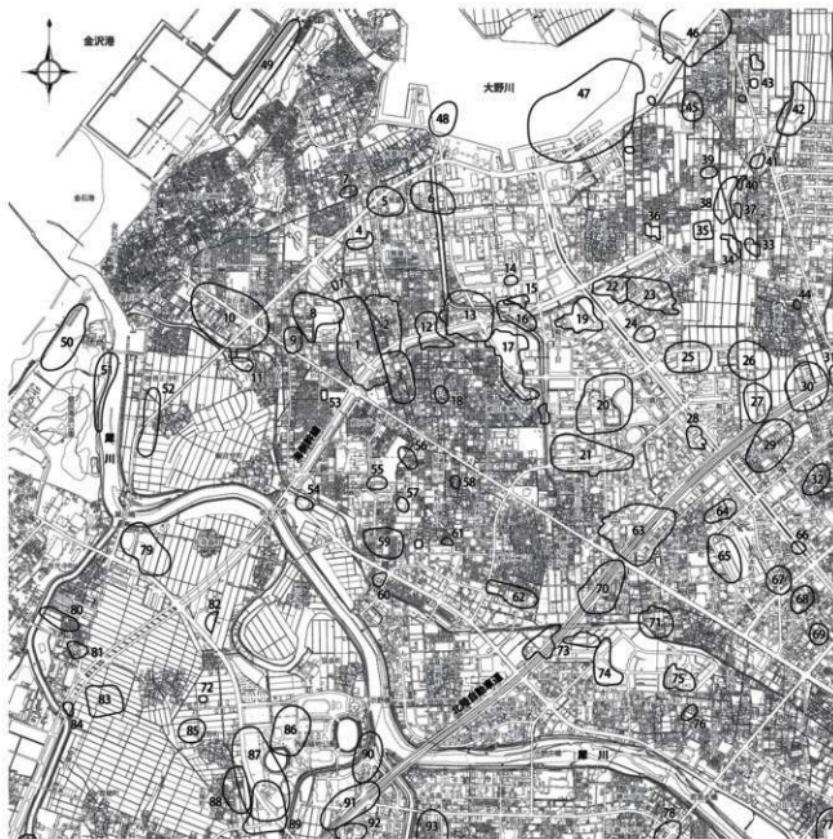
第3図 石川県と金沢市の位置

第2節 歴史的環境

畠田・寺中遺跡の周辺に分布する遺跡を時代毎に概観すると、縄文時代には後期中葉と晩期後葉の松村A遺跡(59)や晩期の土器・石器が出土する本遺跡があり、近岡遺跡(46)では昭和45年の調査で花粉分析から縄文晩期の農耕について話題になった。弥生時代は戸水B遺跡(20)、戸水C遺跡(47)、藤江C遺跡(21)などで前期からの遺物が確認されており、畠田C遺跡(13)などで遠賀川式土器が出土しているが、中期以降増加する傾向にあり、西念・南新保遺跡(29)のような後期へ繋がる拠点的集落も出現する。本遺跡においては中期から遺物が確認されている。古墳時代は弥生終末期の遺跡が継続されることが多いが、中・後期になると激減し、本遺跡の他、周辺では藤江B遺跡(63)で確認できる。当該期の須恵器を多く確認している本遺跡や藤江C遺跡などが中・後期の拠点的集落になる可能性があり、本遺跡に関しては弥生時代終末から7世紀代まで継続して確認できる稀有な事例である。

奈良・平安時代は再び遺跡が広く分布し、犀川や大野川河口周辺に津湊関連遺跡や官衙・荘園関連遺跡が出現する。本遺跡においても8世紀前半から中頃の大規模集落が確認され、遺構の規模や「津司」墨書き土器から金石本町遺跡と一連の港湾関連遺跡と考えられている。また、石川県調査区から造渤海使が帰国した「天平二年(730)」の記年銘墨書き土器が出土しており、その際の要応に使用された可能性が指摘されている。また、近隣の畠田ナベタ遺跡(17)からは大陸産とされる青銅金箔張の帶金具(巡方)が出土しており、具体的な大陸との交流を物語る遺跡群といえる。鎌倉・室町時代は、本遺跡も含めて当該期の遺跡が広く分布している。本遺跡では、堀で囲繞された方2町×1町半程度の空間が検出されている。南新保北遺跡(44)では銭の出納に関わる付札木筒が出土している。戸水C遺跡は古代以来の津湊関連遺跡と評価されている。

本遺跡は、大野荘湊を含む大野荘内(一時期は富永御駄内か)に所在する。畠田地名の初見は日本書紀記「大野郷畠田村」であり(金沢市1998)、平安時代にはその名が認められる。中世には「宇福田村」、「宇根田村」、「宇祢田村」、「うね田村」などとみえる。



1 銀田・中道跡	(弥生~中世)	32 西条東遺跡	(弥生)	63 藩江日遺跡	(弥生~平安)
2 敦田跡	(縄文~平安)	33 西江ノシロ遺跡	(縄文~室町)	64 二口日丁日遺跡	(弥生~古墳)
3 敦田大佛川遺跡	(縄文~室町)	34 大友人遺跡	(弥生~平安)	65 二口六丁八遺跡	(弥生~古墳)
4 桂町人道跡	(弥生~中世)	35 大友人遺跡	(古墳)	66 西条エジタ遺跡	(弥生~古墳)
5 無量寺D遺跡	(古墳)	36 大友人遺跡	(弥生~平安)	67 西条ケボ遺跡	(弥生~古墳)
6 無量寺E遺跡	(古墳)	37 西江ノシロヤ遺跡	(古墳~室町)	68 二口ノミズ遺跡	(弥生~古墳)
7 森遺跡	(縄文~平安)	38 西江ノシロヤ遺跡	(古墳~室町)	69 藩江日遺跡	(弥生~古墳)
8 寺中日遺跡	(縄文~平安)	39 近岡カツタンが遺跡	(弥生~平安)	70 藩江日遺跡	(弥生~平安)
9 中道跡	(弥生)	40 西江西遺跡	(弥生~古墳)	71 北町遺跡	(縄文)
10 金石町人道跡	(弥生~平安)	41 直江中北遺跡	(縄文~室町)	72 御館山遺跡	(不詳)
11 中町台場跡	(江戸)	42 直江北遺跡	(縄文~室町)	73 稲田・小野の遺跡	(弥生~平安)
12 羽根田人道跡	(縄文~平安)	43 江戸川人跡	(縄文~平安)	74 稲田・中村・また遺跡	(弥生~平安)
13 羽田人道跡	(縄文~平安)	44 南新保之遺跡	(古墳~中世)	75 菓折山遺跡	(弥生~平安)
14 無量寺D遺跡	(弥生~平安)	45 近岡カツシマ遺跡	(弥生~奈良・平安)	76 若宮遺跡	(室町)
15 無量寺C遺跡	(奈良・平安)	46 近岡遺跡	(縄文~室町)	77 岸川(根橋)遺跡	(縄文~古墳)
16 敦田人道跡	(弥生~奈良・平安)	47 戸次人道跡	(縄文~中世)	78 玉田日遺跡	(弥生~平安)
17 無量寺C・D遺跡	(不詳)	48 稲田・中村・河津遺跡	(縄文~古墳)	79 稲田日遺跡	(弥生~平安)
18 稲飯原遺跡	(不詳)	49 金石北遺跡	(不詳)	80 専光寺染色免地遺跡	(古墳~平安)
19 尾水大西遺跡	(奈良・平安)	50 曹正寺香取砂丘遺跡	(縄文・奈良・平安)	81 専光寺染色免地遺跡	(古墳~平安)
20 尾水日遺跡	(弥生・平安)	51 曹正寺遺跡	(縄文・奈良・室町)	82 赤土遺跡	(弥生)
21 尾水人道跡	(不詳)	52 曹正寺の遺跡	(縄文・奈良・室町)	83 赤土寺跡	(古墳)
22 尾水ニヨダ遺跡	(弥生~平安)	53 中寺の南遺跡	(古墳)	84 高見遺跡	(弥生~室町)
23 大友西遺跡	(弥生・古墳・平安)	54 鶴音堂日遺跡	(弥生~室町)	85 稲日野遺跡	(縄文・古墳)
24 戸水・大友遺跡	(奈良・平安)	55 鶴音堂日遺跡	(弥生)	86 徒昌・北塙C遺跡	(古墳~平安)
25 南新保E遺跡	(弥生~健倉)	56 松村吉の瀬遺跡	(古墳・平安)	87 北塙B遺跡	(平安)
26 南新保F遺跡	(不詳)	57 松村吉の瀬遺跡	(古墳)	88 松村吉の瀬遺跡	(不詳)
27 南新保G・枚田遺跡	(弥生~平安)	58 松村吉の瀬遺跡	(室町)	89 佐原遺跡群	(古墳)
28 二ツ堀町人道跡	(弥生~平安)	59 松村人道跡	(縄文・古墳・藤倉・室町)	90 古府人タガリ遺跡	(弥生・平安)
29 西念・新新保遺跡	(弥生~平安)	60 松村人のまえ遺跡	(弥生~朝)	91 古府人ルビ遺跡	(弥生~平安)
30 南新保D遺跡	(弥生~平安)	61 松村日遺跡	(縄文・弥生・江戸)	92 古府人遺跡	(不詳)
31 南新保B遺跡	(弥生)	62 松村見足遺跡	(室町~後期)	93 高島遺跡	(弥生・古墳)

第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 [S = 1/30,000]

第3章 検出遺構

第1節 概要

本遺跡では、掘立柱建物、竪穴系建物、布柱建物、欄列、井戸、土坑、区画溝、川跡などを検出しているが、本書で対象としている主幹線4区(以下、調査区)では土坑、ピット、溝、川を検出しており、主に古墳時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代のものがみつかっている。

遺構平面図については、「木曳野遺跡群I」で各図を掲載したために本書では未掲載だが、第5図に今回報告対象となる調査区の遺構全体図と各遺構名を示した。併せてグリッド配置図を示したので参考にしていただきたい。また、第2図に木曳野遺跡群の全体図と建物や井戸、溝など主な遺構名を示したものも掲載した。「木曳野遺跡群VI」に掲載したものの誤記等を訂正したものである。「木曳野遺跡群II」～「木曳野遺跡群V」については、報告対象とする個別遺構が遺跡の中でどこに位置するかが図示されていないので、本図を参照いただきたい。

第2節 土坑・ピット

SK200(第6図) 調査区中央西側に位置する土坑である。掘方は隅丸方形を呈し、SD203に切られる。長軸約1.6m、短軸約1.4m、深さ約0.4mで、古墳時代前期の土器(1.2)が出土している。

SK201(第6図) 調査区中央東側、大河跡と重複する形で検出した円形土坑である。直径約1.0m、深さ約0.2mを測る。遺物は出土していない。

P200(第6図) 調査区中央西側に位置する小穴である。掘方は南北に軸をとる楕円形形状を呈し、長径約0.7m、短径約0.4m、検出面からの深さ約0.3mで、古墳時代前期に属するくの字甕(3)が出土している。

第3節 溝・川

SD200(第6図) 調査区中央西側に位置する、幅約1.5m、検出面からの深さ約0.2～0.3mを測る、北東～南西に軸をとる溝である。検出延長約8.0m、東側は大河跡と重複し、西側は調査区外へと延伸する。

SD201(第6図) SD200の南側に位置する溝状の落ち込みで、軸を南北方向にとる。幅約1.2m、深さは0.1mに満たない。SD200との切り合いは不明、検出延長約3.3m、南側で2条に分かれれる。

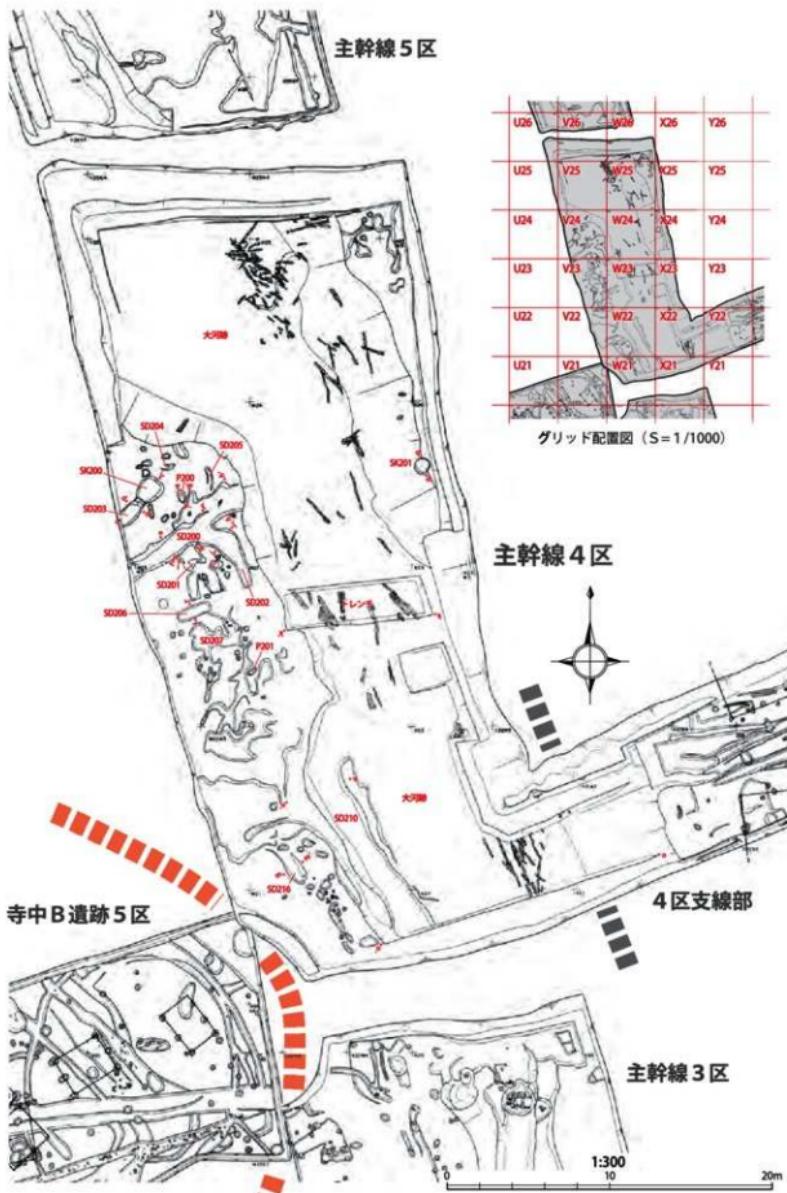
SD202(第6図) 軸を南北にとり、SD202近辺で合流するかのように屈曲する溝である。幅は約1.5m～0.6mとばらつきがあり、深さは約0.1mに満たない。検出延長は約4.3mである。

SD206(第7図) SD200の南側に位置する浅い落ち込みである。軸を東西にとり、検出延長約2.2m、幅約0.8m、深さ約0.1m前後を測る。

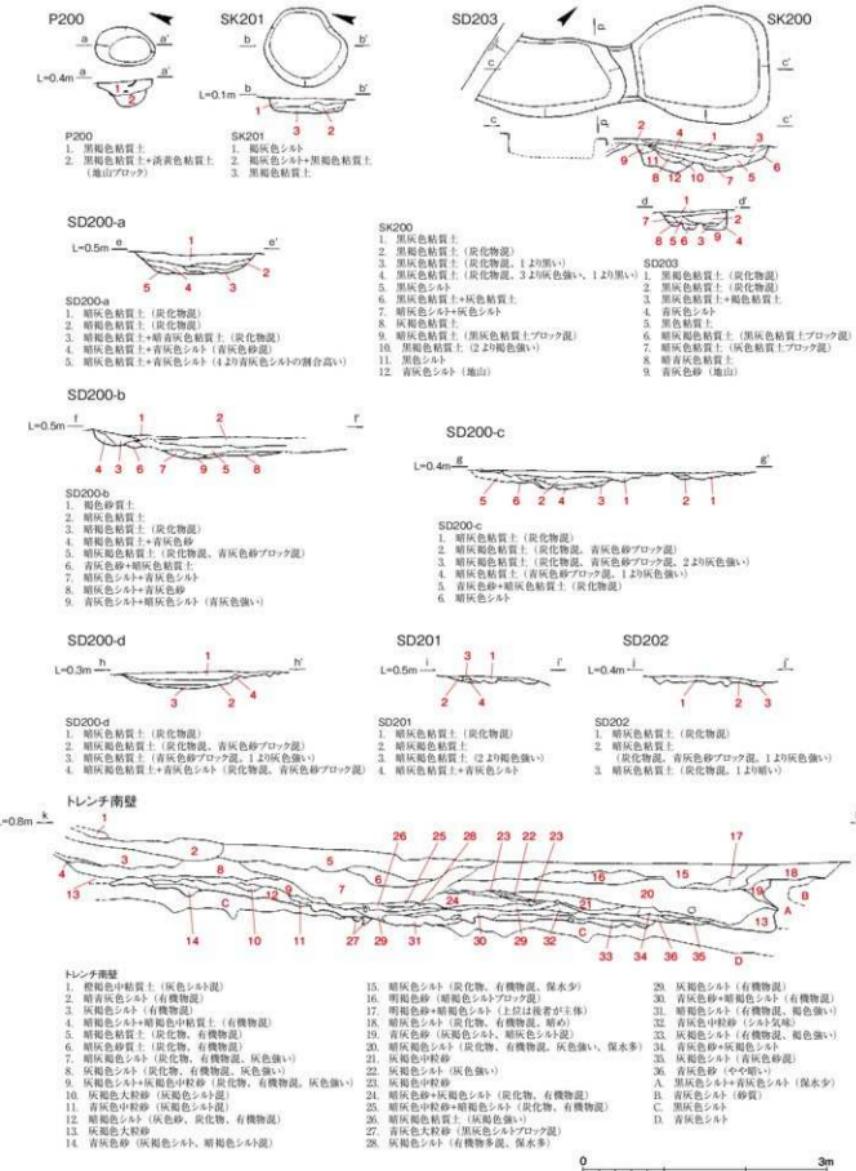
SD210(第7図) 調査区南西側、大河跡西岸と重複する形で検出した軸を南北方向にとる溝で、主幹線3区のSD222と同一の溝である可能性が高い。検出延長約15.0m、幅約30m、検出面からの深さ約0.6m～0.9mを測る。11世紀～13世紀頃の遺物が出土している。詳細は既刊書(歛田・寺中遺跡V)に詳しい。

SD216(第7図) 調査区南西側で検出した溝状の落ち込みで、検出延長は約2.0m、幅約1.0m深さは約0.1m前後である。軸は北北西～南南東、北側は浅くなり消失する。

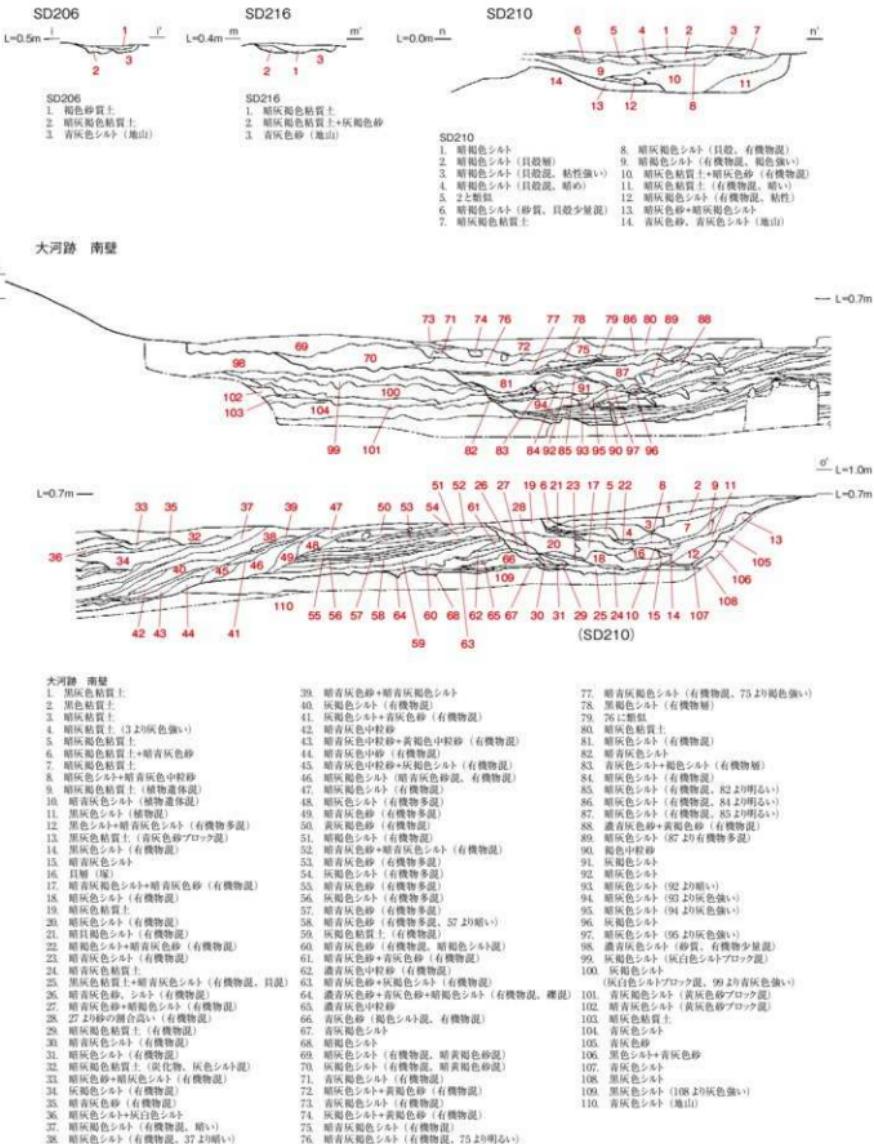
大河跡(第6・7図) 調査区東半を占める大規模河川である。主幹線1区SD303、同2区SD240・SD244、同3区SD201と同じ川と考えられる。詳細は既刊書(歛田・寺中遺跡V・VI)に詳しい。土層確認用にトレチを設定し、併せて調査区南壁でも土層断面図を作成したが、作図途中の崩落によつて土色の一部に不備があることをお詫び申し上げたい。



第5図 遺構全体図（主幹線4区）〔S = 1/300〕



第6図 P200・SK200・SK201・SD200・SD201・SD202・SD203・トレンチ [S = 1/60]



第7図 SD206・SD210・SD216・大河跡 [S = 1/60]

第4章 遺物

第1節 概要

本書で報告する出土遺物の大半は古墳時代前期～中期前葉のものであり、主に大河跡から出土している。第2節から遺構毎に報告する。大河跡出土遺物の図版は基本的にグリッド別・器種別となっており、説明については番号順に行うのでご了承願いたい。なお、グリッド配置については第5図を、遺物が属するグリッド、個々の遺物の法量や調整等は第3表～第5表を参照願いたい。同表遺構欄の「●区」は「主幹線●区」を示している。遺物取上時に錯誤のあったものは訂正して掲載しているのでご了承願いたい(Y25N4→W25)。また、文中の分類や年代観については、巻末の参考文献に記した各論考を参照願いたい。

第2節 土坑・ピット

SK200(第8図1・2) 1は土師器の甕で、有段口縁の内面に指頭圧痕、外面に擬凹線7条が確認できる。2は高杯で、杯部が屈曲して広がり、脚裾部が強く屈曲外反する。田嶋分類(田嶋1986)のH類に相当する。P200(第8図3) 3は口縁端部が肥厚するいわゆる布留甕であり、古墳時代前期の範疇である。

第3節 溝・川

4区 SD210(第8図4～31、第29図400、第30図438～440、第32図451～464) 4・5は土師器の蓋で、双方ミガキ調整が施される。6は土師器の小壺、7・8は甕である。いずれも古墳時代前期後葉のものであるが、この遺構は大河跡と重複して検出されており、これら遺物は混入品と考えられる。

9・10は須恵器の無台坏、11は灰釉陶器の碗、12は珠洲焼の鉢底部である。13は土師器の壺か。底部に糸切り痕が確認できる。14～24は土師器皿である。14・16・18・19・21・23・24がロクロ土師器皿、その他は非ロクロである。24は25とあわせて椀である可能性がある。26・27は内面黒色処理の施された台付椀で、26は高台外面に、27は底部に工具痕が顕著である。28・29は白磁碗で、それぞれ太宰府分類(太宰府市教育委員会2000)の白磁碗II-4a類、白磁碗II-1類であろうか。11世紀後半～12世紀代のものと考えられる。30・31は珠洲焼の鉢で、口縁部の形態から珠洲焼編年(吉岡1994)I期の製品と考えられる。12世紀後半のものと考えられる。

石製品には400の擬形打製石斧があるが、混入品とみられる。金属製品では438・439の鉄製刀子、双方茎に目釘穴が確認できる。440は不明鉄製品で、飾り金具の可能性がある。451～464は木製品である。457・458は他の材との結束装置が認められ、雑具部材と考えられる。461・462は円形板で、桶か曲物の底板であろう。463は範状に薄く加工されている。464は火鑽臼で6箇所の炭化した使用痕が認められる。

4区 大河跡(第9図～第28図、第29図401～419、第30図420～437・441～444、第31図、第32図465～490、第33図～第35図) 32～42は土師器甕である。32は頸部で緩やかに外傾し、先端に向かって内湾する口縁部を持つ。33の口縁部は直線的に立ち上がり端部に面取りがみられる。34・35・37の口縁は緩やかに外湾する。36・38の口縁は直線的に外傾する。39は山陰系の大形甕で口縁下端に突帯ともいえる明瞭な稜が確認できる。40～42は小形の甕である。43～46は壺で、43は長めの頸部をもち、口縁部に6条の擬凹線が施される。44は有段の口縁を有する。45は外反する口縁部先端に内屈する口縁帶が付されている特徴的なもので、弥生時代中期前半のものと考えられる。条痕が施され、口縁外面に浮文・刺突文、口縁内面には波状文が確認できる。46は外反して延びる口縁部先端に断面三角形の口縁帶を作り出し、そこに棒状浮文が2条確認され、全面に赤彩処理が施されている。田嶋分類のF類に相当する。47は壺の体部である。48・49はミニチュアの土器で、48は彫形、49は壺形である。50・

51は手捏土器である。52～54は小型壺で、田嶋分類F類に該当する。55は装飾器台で、内面に一部赤彩が残る。56は外面に赤彩の施された小型器台の脚部か。57～61は高杯で、57の杯部は緩く内湾する。58～61は田嶋分類のH類に相当しようか。62は有孔鉢の底部で、内外面ハケ調整が施されている。63～66は土師器鉢で、いずれも内面は丁寧にミガキ調整が施される。67～77は土鍤である。78は縁口で、滓が付着している。

79～92は土師器壺で、79～86は口縁部が外反する壺、87～88は口縁端部が肥厚するいわゆる布留壺で、古墳時代前期の範疇である。91は有段口縁で擬凹線が施されている。92は小型の壺で、口縁外面に弱い段をもつ。93～100は土師器壺である。93～95は頭部から外反する長めの口縁を有する。96は口縁部を欠損する壺の体部だが、頸径が小さく、長頸壺と考えられる。97は田嶋分類のF類に相当する壺の口縁部で、棒状浮文が2条確認できる。98・99は壺の頭部で1条の突帯を巡らせ、突帯上にキザミを施している。100は大形壺で、口縁部は段を持ち直線的に立ち上がり、口縁外面に棒状浮文が2条確認できる。田嶋分類H類に相当する。101は肩部にキザミ突帯を巡らせる小型の壺であろうか。102は外面に黒漆を施す。101・102ともに精緻な作りではないが、装飾的要素が強く、特筆される。103は杯状の土師器であるが、小型の高杯であろう。104は小型高杯の杯部、105は小型の高杯ないし器台の脚で、ミガキ調整が施されている。106～124は土師器高杯の杯部で、106～112・114・115は杯部が屈曲して広がる。113は碗形の杯底部と外反する口縁部をもつ。田嶋分類のB1類に分類される。116は大きな杯底部から屈曲外反する口縁部をもち、弥生時代後期のものと考えられる。117～123は土師器高杯の脚部である。117は緩やかに広がる裾部をもち、透穴が3箇所確認できる。118～123はいずれも脚裾部が強く屈曲外反しており、田嶋分類のH類に相当する。古墳時代前期中葉～後葉のものである。124は碗形の杯部と透穴を有する八の字状の脚が付く。田嶋分類のG類である。125は台付鉢か。鋭く聞く裾部の先端は面をとる。126～135は器台である。126・127は小型器台で、碗状の受部と八の字状に聞く脚に透穴が確認できる。128・129は脚部で、裾部に段を有し透穴と装飾を加え、丁寧なミガキ調整が施される。130は縦位に2孔1対の透穴を設ける脚部である。131は赤彩が施される有段の脚部である。132は外反的に聞く深めの受部を持ち、脚は透穴をもち緩やかに聞く。古墳時代前期中葉か。133は装飾器台の受部下端、134は鼓形器台である。135は大形の器台で、裾部に透穴と4条の沈線による加飾が確認できる。136は壺か鉢の底部であろう。137は小振りで碗状の体部に直線的に聞く口縁部をもつ鉢である。138・139は鉢で、八の字状に屈曲し内湾する口縁部をもつ。139は平底である。140～143は蓋である。143は赤彩・加飾の状態から蓋としたが、鉢であるかもしれない。144・145はミニチュアの土器で、144は甕形、145は鉢形で、双方精緻な作りである。146は小型の丸底壺、147・148は手捏土器である。149・150は有孔鉢の底部で、151は小型の鉢か高杯の杯部であろう。152～157は碗で、154は内湾する体部と外反する口縁部をもつが、他のものは内湾する口縁部を端部で丸くおさめる。いずれもミガキ調整が施される。158・159はロクロ土師器の皿である。160は内面黒色処理の施される有台椀、161は柱状高台をもつ椀であろう。162・163はロクロ土師器の椀である。164は台付壺の脚部か。脚内部に指痕圧痕が認められる。165は柱状の高台をもつが、鉢であろうか。143に似る。168～172は土鍤である。172は有孔土玉とするべきか。出土したロクロ土師器は大河跡と重複するSD210からの混入であろう。

173～175は绳文土器である。173・175には対向玉抱き三叉文がみられ、晩期初頭御経塚式期であろうか。176～219は土師器壺とした。176～181は有段口縁をもつ。176は口縁に波状文を巡らせ、177～181は擬凹線である。182は近江・東海系、183は山陰系の口縁をもつ。184は受口状の短い口縁部をもつ。185～193は口縁端部が肥厚する布留壺である。189は口唇に沈線状の調整がみられるほか、肩部にキザミを巡らせている。漆11群、古墳時代前期後葉に該当すると考えられる。194～208は土師器壺で、口縁部が屈曲し外反するタイプのものである。202・203は小振りで、203は特に粗い作りである。

209は大型の山陰系壺で、肩部に櫛描波状文が施される。210は同じく山陰系壺か、口縁の段は明瞭でない。211～216は壺類の底部である。217～219は土師器壺だが一樣に粗雑で、口縁に歪みがみられる。218は波状の口縁が微妙である。220～230は土師器の壺である。220は田嶋分類F類、棒状浮文は3条1対である。221は同じく2条1対の棒状浮文をもつが口縁端部の肥厚は認められない。223は円形スタンプ状の文様を口縁外面に巡らす。223は口縁外面に赤彩が施されている。224は直立する頸部からわずかな段を経て口縁部を形成している。225は直立した頸部に強く外反する口縁部をもち、頸部はキザミをもつ突帯で加飾される。226は大形の壺で、大きな有段口縁の外面に円形浮文が付く。227・228は櫛描文が施されており、弥生時代まで遡る可能性があるが不明である。227は山形文、228は山形文と直線文が確認できる。229・230は外面ハケ調整後に粗雑な櫛描文で加飾している。231～237は球状の体部から屈曲し直線的な口縁部を持つ土師器壺である。238は小型の壺で、外面に赤彩が施されている。239は外面と口縁部内面に赤彩処理がなされる。240は無頸壺で、蓋装着用と思われる孔が確認できる。241は外面赤彩された台付壺の体部、242は壺類の底部である。243は台付壺の脚であろう。244～246はミニチュア土器で、244は壺形、245は台付鉢形で赤彩が施される。246は有孔鉢形であろうか、底部に穿孔される。247～252は手捏土器である。253は内外面にミガキ処理の施された鉢である。254は椀で、同様の調整が施される。255は蓋である。256～262は土錘で、257・261・262は有孔土玉か。263～275は球状の体部と直線的な口縁部を持つ土師器小壺である。274は田嶋分類のE1類、275はC類に相当する。漆12群・古墳時代中期前葉のものであろう。276～279は土師器高杯の杯部、280～285は脚部である。276は口縁部まで内湾気味の粗雑な作りのものである。283は脚部に工具で横描の加飾を施している。286～300は土師器高杯である。287は直線的に開き端部を面取りする口縁部をもち、外面に赤彩が施される。289は碗状の受部から外反する口縁部をもち、丁寧なミガキが施される。田嶋分類のE2類に相当する。293は杯部内面のミガキ調整を中央から放射状に行うことで加飾的な要素をもたせる。294は丁寧なミガキの後、外面に赤彩を施している。295は脚部であるが、頸部から直線的に開き、裾部で短く屈曲する。298の杯部内面はハケ状工具で単位を区切って調整されており、加飾的要素と認識される。300は小型のもので、縦位2孔1対の透孔が認められる。301・302は台付鉢とした。301内面のミガキ処理は特徴的で、中心から弧を描く放射状に施されており、加飾的な要素が強い。302の内面も放射状のミガキが施されている。303～308は器台である。303はいわゆる小型器台で、透孔は3箇所確認できる。304は脚部に櫛描直線文を2条巡らせている。307は脚部と裾部の変化点に突帯をもつ。透孔は2孔1対で3箇所確認できる。308も同様に突帯をもち、突帯上にキザミを施す。透孔は2孔1対2箇所に確認できる。309は受部に透孔をもつ裝飾器台である。310は鼓形器台である。311は須恵器甕で、細かな櫛描波状文が施されている。

312～319は土師器椀である。314は高台をもち、内面は黒色処理が施される。315～317はロクロ土師器椀で、317は柱状の高台をもつ。318・319は内面黒色土師器椀で、318は外面に赤彩処理がなされ、高台をもつ。320は内面黒色の鉢であろう。321はロクロ土師器皿である。322・323は白磁碗で、322は小片のためもう少し傾き太宰府分類II-1類、323はIV-1a類に相当するか。ここで報告した土師器椀・皿、白磁類は重複するSD210からの混入と考えられる。324～326は土師器壺としたが、325は口縁形態とキザミ、櫛描波状文による加飾から壺とすべきか。324は口縁外面に擬凹線を巡らせ、内面には指頭圧痕が認められる。326は壺で、体部は中央部で大きく張り出す。327・328は山陰系の壺か。口縁下端に弱い突出が認められる。

329はミニチュアの土師器蓋である。330は大型の有段壺で、12条の擬凹線が施されている。331～333は土師器壺で、331は直線的な頸部と受口状の口縁部を持つ。334は壺か。浅い体部と短い口縁をもち、調整は粗い。335は土錘である。336は高杯の脚部を蓋として転用したもので、欠損断面が研磨されている。337は壺としたが、形状から趣向土器の可能性がある。338は高杯の杯部か。内面に丁寧なミガ

キ調整が施され、須恵器坏身の形状に似る。339は小型の器台で、透孔を4箇所確認できる。340は高杯で、柄部端に1条の沈線を巡らす。341～343は椀で、内外面ともにミガキ調整が施されている。

344は装飾壺で、口縁部のみの出土だが、内外面に櫛状工具を使用した華美な装飾が施される。345は壺の口縁部で、口縁下端を断面三角形に拡張し、擬凹線を巡らせたち円形浮文を貼り付けている。346は土師器壺である。347・348は高杯で、347は厚手の器壁を有し、内外面をミガキ調整とする。348は脚部で、透孔が3箇所確認できる。349は装飾器台で、受部下端拡張部に擬凹線を施し、赤彩が施される。359は器台の脚で、透孔は2孔1対3箇所に確認される。351は鉢か。体部中央に1条の凹みを設け上部と下部を区分けし、上部に箆状の工具を用いた綾杉状刺突で加飾するが全容は不明である。352は土師器の壺で、丁寧なミガキ調整が施されている。353～356はグリッドから3区出土の可能性がある。353は壺の肩部で、粗雑な櫛描波状文と直線文で加飾される。354・355はミニチュア土器で、354は壺形、355は台付鉢で外面に線刻がある。356は有孔鉢の底部であるが、高杯杯部の転用か。357は須恵器蓋、358は須恵器坏身で、いずれも和泉陶邑窯編年(田辺1981)のTK47～MT15形式が想定される。359は多孔の瓶である。外面には粗いハケ調整、内面にはケズりが見受けられ、孔13個が残存する。グリッドから3区出土のものか。360は土師器の壺である。厚手で、くの字状に外傾する口縁をもつ。361は須恵器の壺で、タタキ目の分類については外面が内堀分類(内堀1989)平行線文a類、内面は同心円文b類である。

362は器台とした。田嶋分類の壺F類と同様の口縁形態を持つが、口縁部が緩やかに内湾する。棒状浮文2条1対が確認できる。363は同様の口縁形態をもつ壺である。364は頸部にキザミ突帯を巡らす壺と判断した。弥生時代中期か。365は壺の体部破片か。外面に線刻が確認でき、絵画土器の可能性がある。366は土師器壺の口縁部で、端部を面取りし、綾杉状のキザミを巡らせる。367は突帯上キザミをもつ壺の頸部である。368は強く聞く壺の口縁部で、キザミのある棒状浮文が2条確認できる。369は土師器竈形土器、370は土師器小壺、371は鉢である。371は無頸壺で、蓋装着用と考えられる孔が2孔1対2箇所に確認できる。373・374は土師器蓋で、丁寧なミガキ調整が施される。375は竈類の支脚である。376は高杯で、杯部と比して太い脚部である。377は直線状に聞く器台の脚部で、透孔は3箇所確認できる。杯部を結合、充填した後に再穿孔している。

378は布留壺で、379は口唇部肥厚がわずかに認められる土師器壺である。380・381は绳文土器で、御經塚式期に属する。381は前出174と同一個体と思われ、突帯と刺突文が確認できる。382は土師器壺で、粗い作りで口縁部は外反する。383は土師器の丸底壺、384は口縁に段をもつ小壺、385・386は小壺である。387は鉢で、底部内面は厚く、指頭压痕が認められる。388は大型の壺である。389は土師器有孔鉢の底部。390～392は土師器高杯である。390は杯部内面のミガキ調整が中心から弧を描く放射状に施されており、加飾性が強い。391・392は田嶋分類のH類に相当する。

393は直立気味の口縁に2条の沈線を巡らせる。弥生時代のものか。394は青磁染付皿か、高台内に染付で「洪武年造」の記載がある。395は龍泉窯系青磁碗で、太宰府分類のIII-IBに相当する。13世紀代のものか。396・397は土師器小壺で古墳時代前期～中期、398は須恵器無台壺、399は瓦塔の屋蓋部である。方形の縁長押部、半裁竹管状工具で作り出した丸瓦部が2面に残存し、中央部に設けられた穴の一部が確認できる。孔径は不明だが、7cm前後と想定すれば、縁長押内法で約13cm前後となる。4区大河跡からは当該期出土の遺物はほとんどなく、時期は不詳と言わざるを得ないが、既刊報告書(木曳野遺跡群IV～VI)で報告されている同一河川(主幹線1区SD303・同2区SD240・SD244・同3区SD201)からは田嶋編年(田嶋1988)III期～IV期の遺物が多く報告されている。

401は粘板岩製の石庖丁か。402は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。403は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部から刃部にかけて幅広となる。404は全周に敲打痕の認められる敲石である。405は全面に使用痕のある流紋岩製の砥石である。406・407は施溝分割痕の残る変質流紋岩製の剥片である。408～410は凝灰岩製の打製石斧である。411は刃部を欠く磨製石斧、412は石英の剥片、413は変質流紋岩の

剥片である。414は変質流紋岩の石核、415は粘板岩の石核とした。416は擦痕から砥石としての用途が想定されるが、周囲全面に敲打痕が認められる。417は縄文時代の鏝形石器で、粗い調整が施されており、未成品と考えられる。418は安山岩製の砥石、419は安山岩製の打製石斧で、撥形を呈する。420は玄武岩製の打製石斧で基部を欠く。421は石錘で、括部に使用痕が明瞭である。422は被熱した安山岩で煤が付着しており、炉石と考えている。423は変質流紋岩製の剥片としたが、鐵形石製品未成品の可能性もある。424は石錘で、括部に使用痕がある。425～427は砥石で、426・427は凝灰岩製で中央部に線状の擦痕が残る。428は石錘で、使用痕が顕著である。429は砥石か。431・432は変質凝灰岩製の管玉で、いずれも両面穿孔である。433は変質蛇紋岩製の勾玉、434は碧玉製の丁字頭定形勾玉で、頭部を欠くが、孔部周間に5条の施溝が確認できる。435・436は滑石製の勾玉である。437は蛇紋岩製の勾玉で、両面穿孔である。

441は銅鍬で、有茎式である。442は鉛滓、443は鉄製であるが用途不明で鉄製品残欠とした。台付の円錐形を呈する。鍬か。444は鉄製の角釘である。445はシカの右肩甲骨で、焼灼痕は認められない。計測箇所は青谷上寺地遺跡Ⅲの計測法（井上2001）による。446はシカの右上腕骨で、445と同一個体と考えられる。447はシカか。448はイヌの頭骨である。中世犬、雌犬か。448の同定結果は既刊『木曳野遺跡群Ⅰ』に掲載しているのでそちらを参照願いたい。

木製品は449・450・465～579が出土している。時期的には漠然とはあるが大河跡出土土器が参考になる。449は弓で、弦を突状に加工する。450は堅竹である。465は結菌式堅櫛で、黒漆で固められる。466～479は加工痕の残る板状・棒状の木製品である。467は木皿か。477は糸巻部材、479は履物の可能性がある。480～482は弓で、480・482には加工された弦が確認できる。494・495は同一個体と思われ、鍬であろうか。496は杓子状の木製品、500は薄い作りで箆状とした。508は棒状で、一端が薄く加工されており、杓子状か。511は工具等の柄である可能性がある。514は箸、522は柵状を呈する。524は鍬ないし櫛であろう。525は桶の側板であると考えられ、上下を黒漆で装飾する。526は漆器の椀で、全面に黒漆が塗られている。527は建築部材と考えられる。屋根材か。528は折敷底板である。530は平面橢円形を呈し、槽とした。531は組合式の刀柄である。532は木鍤である。533は弓で弦に造出が認められる。541～543はナスピ形の平鍤である。544は舟形で、軸先に細かな加工がみられる。545は湾曲した一材の両端を粗く削り、中央左右に抉りを加えてあるが、用途は不明である。546はタタリの基礎台部か。547～563は加工が認められる棒状・板状の木製品である。564は堅竹で中央部で欠損している。559は表面に抉り加工が認められ、容器の未成品と考えられる。565は箆状木製品の残欠か。570・571は鞍である。双方ともに馬挟に沿って突帯を設け居木結束のための装置である方孔を穿っている。570は断片のため詳細は不明だが、571は後輪と考えている。573は平鍤であろうか。579は円形板で、桶か曲物の底板であろう。

第4節 遺構外

遺構外（第30図430）430は4区包含層出土遺物で、粘板岩製の石剣断片である。研磨により両面に鏽部分を作り出す。刃部・基部の両端を欠損する。

第5節 捕遺

過年度に刊行した報告書に掲載できなかった遺物について併せて報告する。主に木曳野遺跡群VIで掲載できなかった木製品・金属製品であるが、その他のものもここで取り上げて報告する。出土した調査区・遺構等は第3表～第5表を参照願いたい。

寺中B遺跡、畠田・寺中遺跡1区・3区・県費分C区（第36図580～587・589～593、第37図）580は土師器の甕で、くの字に屈曲する口縁部をもつ。581は無頸壺である。球胴で小さな底部をもつ。582は

柱目取りの木製盤。583は土師器高杯で、八の字状に延びる薄作りの脚部に透穴が認められる。584は高台をもつ須恵器壺の底部である。585は丸木に突帯を作り出した木製品で、栓か。586は高杯の受部を再加工した円盤状の木製品である。587は弓であろう。弾は突起を削り出し穿孔する。589は土器の注口部を再加工したものと考えられ、再研磨されている。590はガラス玉である。591は鉄製の柄付刀子である。刃部の蛍光X線分析結果によると、成分はFe（鉄）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）から成り、濃度(wt%) - 標準偏差 - 強度(cps/μA)はそれぞれFe: 99.40 - 0.06 - 188.046, Ca: 0.49 - 0.06 - 0.081, Rb: 0.11 - 0.01 - 0.410である。柄材はスギである。592は抉りと穿孔がある木製品、593は鉄箸である。594は滑石製の勾玉、595・596は変質流紋岩製の管玉。597は翡翠の剥片だが大きさ等から勾玉の材と考えた。598は土師器壺、599は須恵器の広口壺か。602・603はそれぞれ木錘・櫛であろうか。604は石錘、605・606は不明で、自然津の可能性がある。607は鉄製の刀子で、刃部先端を欠損する。

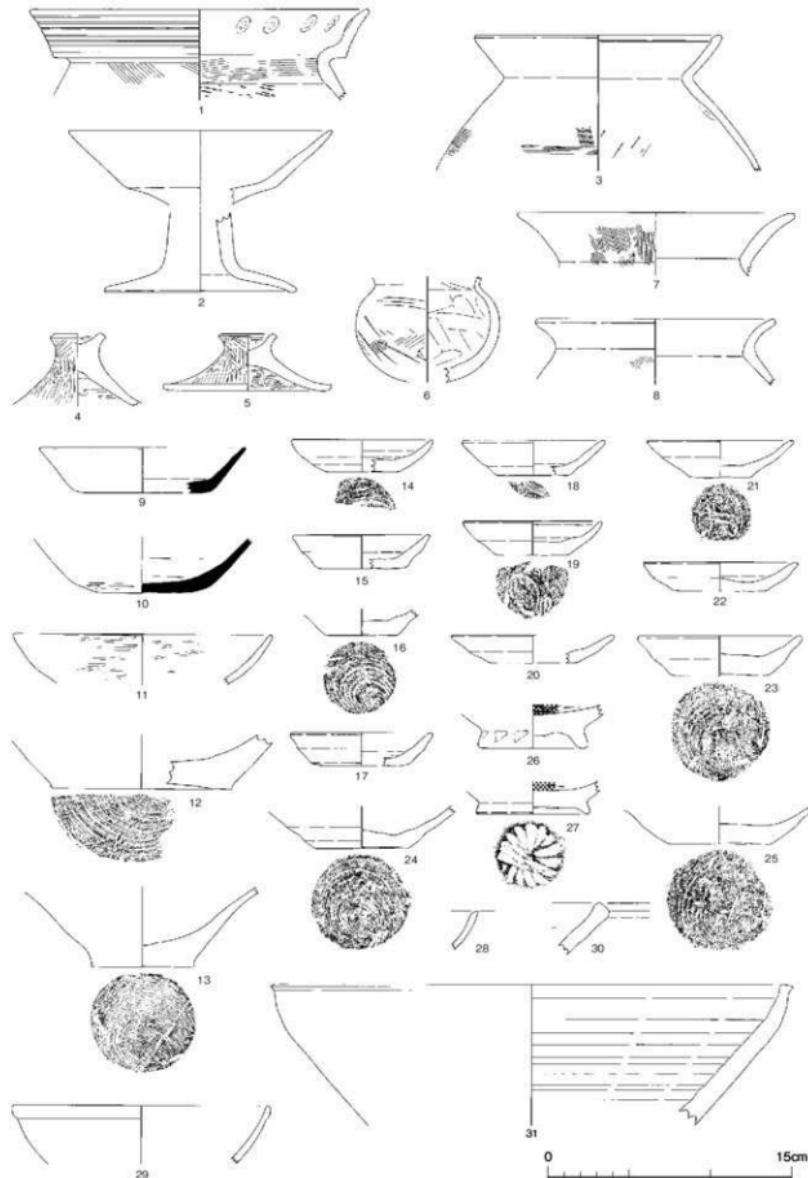
2区出土土製品・金属製品(第38図) 608～626は土錘で、625・626は有孔土玉か。627～632は輪羽口。633は鉛滓、634は有茎の鉄瓶、635は鉄製刀子の刀部。636は元豐通宝、637は皇宋通宝である。2区出土木製品(第36図588、第39図～41図) 588は角材か。639は先端を円柱状に削り出し下端に2つの孔を設ける棒状の木製品で、柄であろうか。646は飾板か。647は下駄の歯である。648は折敷で、4枚が残存している。650～653は箸状で、SE251から出土した。658・661・662・665も箸状木製品である。671は飾板であろうか。672は折敷または円形板、637は横桟である。678は木沓と考えられる。680は漆器蓋か。断面は半梢円形を呈し、中央部に孔を設け、裏面と思しき面に黒漆が残存する。682は鍔であろうか。683・691・699は弓の可能性がある。700は弓で、弾を削り出して突帯状に作る。703は木沓であろうか。704は円形板で、外縁を削て段を設ける。桶の底板か。706は容器または椅子の用途が考えられる木製品である。707は柾または柾。708は何かの柄と考えられる。709はクヌギ材の多又櫛で、柄には2つの方孔が確認できる。泥除具装着装置か。710は火鑓臼で、使用痕は3箇所である。711～719は加工痕が確認できる棒状・板状の木製品である。720・721は雑具の部材であろう。722は漆器椀で、内外面黒漆である。732は農具の柄であろうか。733は紡織具部材、739は斎串である。741～743・745は円形板、744は曲物の側で、結束具としてサクラン類の樹皮が残る。742と同一か。749は井戸の側板と考えられる。

再掲：鑑定対照表

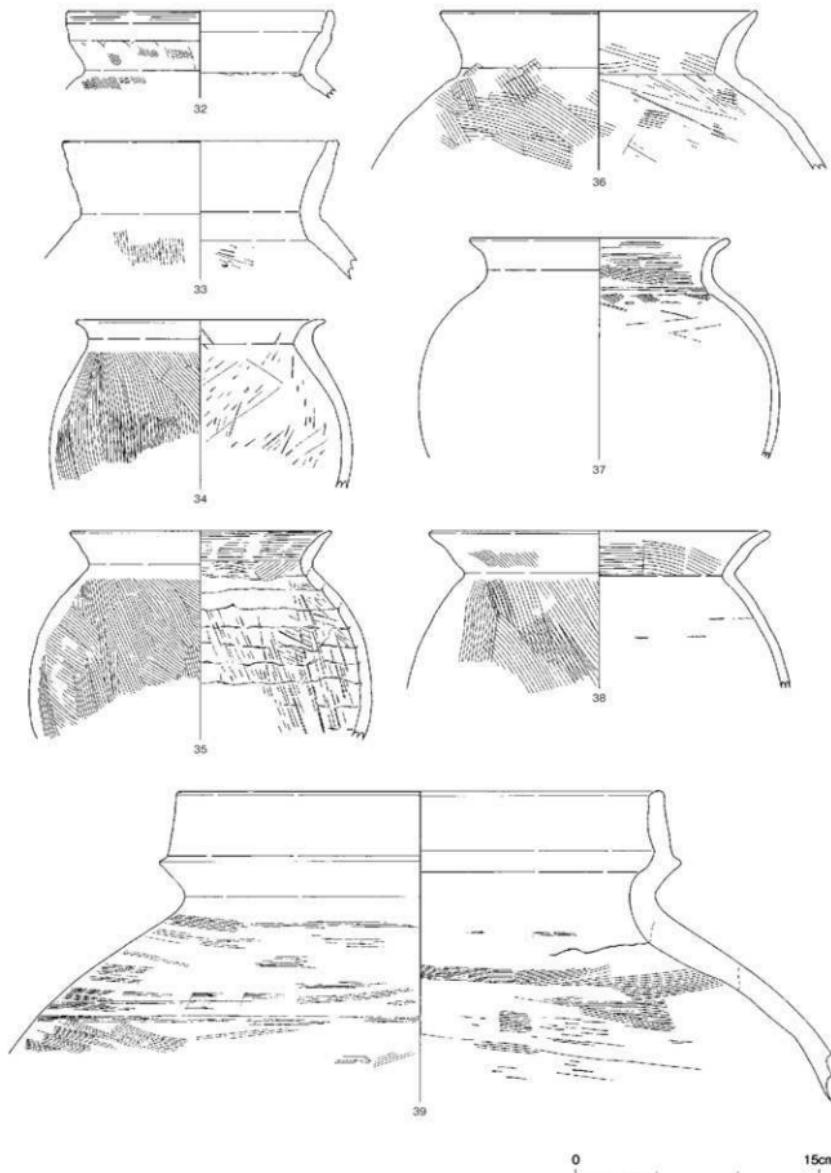
平成14年度～16年度にかけて行った木曳野遺跡群発掘調査において出土した貝類・骨類・石製品の一部について、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し肉眼観察による種・材の鑑定を行っており、今回報告した遺構からの遺物も含まれている(第1分冊P18～29)。今回報告文についてここに再掲し、第1分冊との対照を図ることとしたい。なお、詳細については第1分冊を参照願いたい。

第2表 鑑定対照表

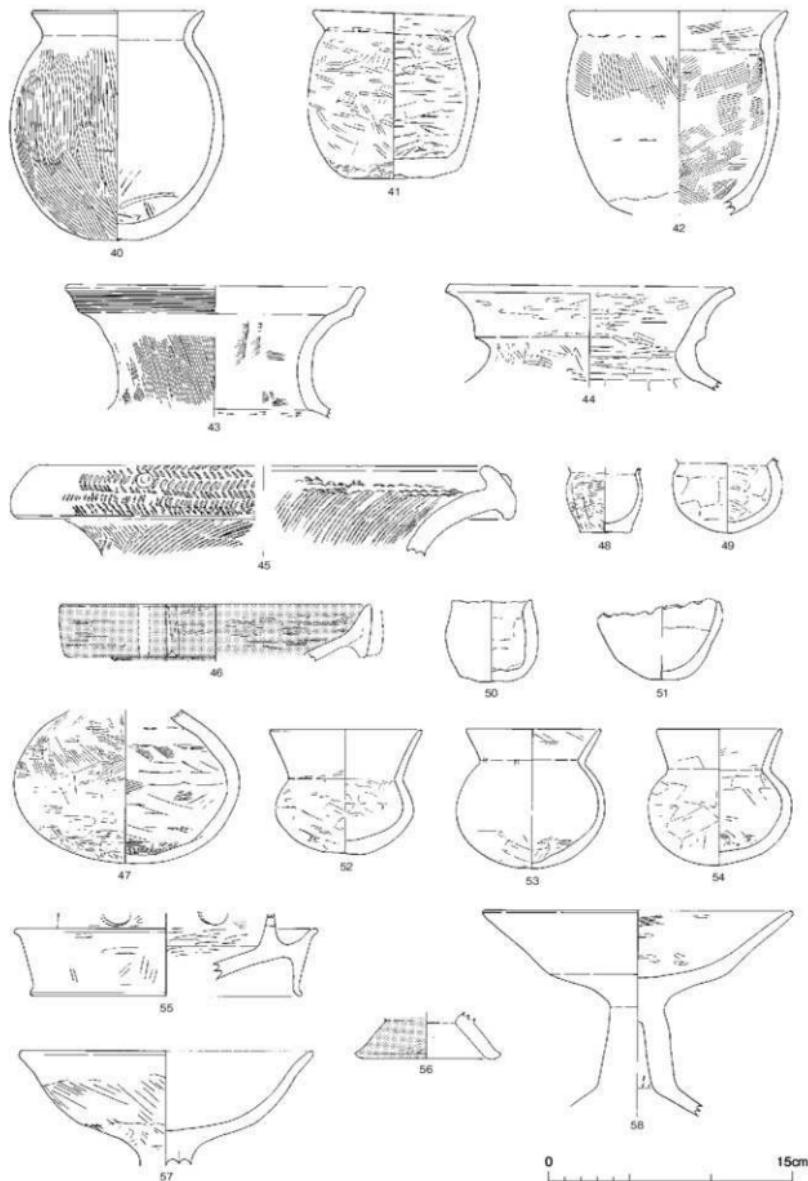
番号	器種	団版一番号	対照表一番号	鑑定	備考	実測番号	番号	器種	団版一番号	対照表一番号	鑑定	備考	実測番号
1	管玉	第30回-431	表18-10	変質流紋岩	4区 W23 大河跡	Y25	7	勾玉	第30回-437	表19-2	蛇紋岩	4区 X21 大河跡	A48
2	管玉	第30回-432	表18-12	変質流紋岩	4区 W25 大河跡	G20	8	頭骨	第31回-448	表13-西15	イヌ	4区 W25 大河跡	N36
3	勾玉	第30回-433	表18-13	変質流紋岩	4区 W-X22 大河跡	G21	9	勾玉	第37回-594	表17-上段	滑石	寺中B通跡 4-2区 植土	G15
4	丁字銷 差別勾玉	第30回-434	表18-6	碧玉	4区 W24 大河跡	A53	10	管玉	第37回-595	表17-中段	変質流紋岩	寺中B通跡 4-2区 S028	G22
5	勾玉	第30回-435	表18-7	滑石	4区 W24 大河跡	Y24	11	管玉	第37回-596	表17-中段	変質流紋岩	寺中B通跡 4-2区 S028	G23
6	勾玉	第30回-436	表18-11	滑石	4区 W23 大河跡	N17	12	勾玉 未成品	第37回-597	表17-下段	翡翠	寺中B通跡 4-2区 S028	N18



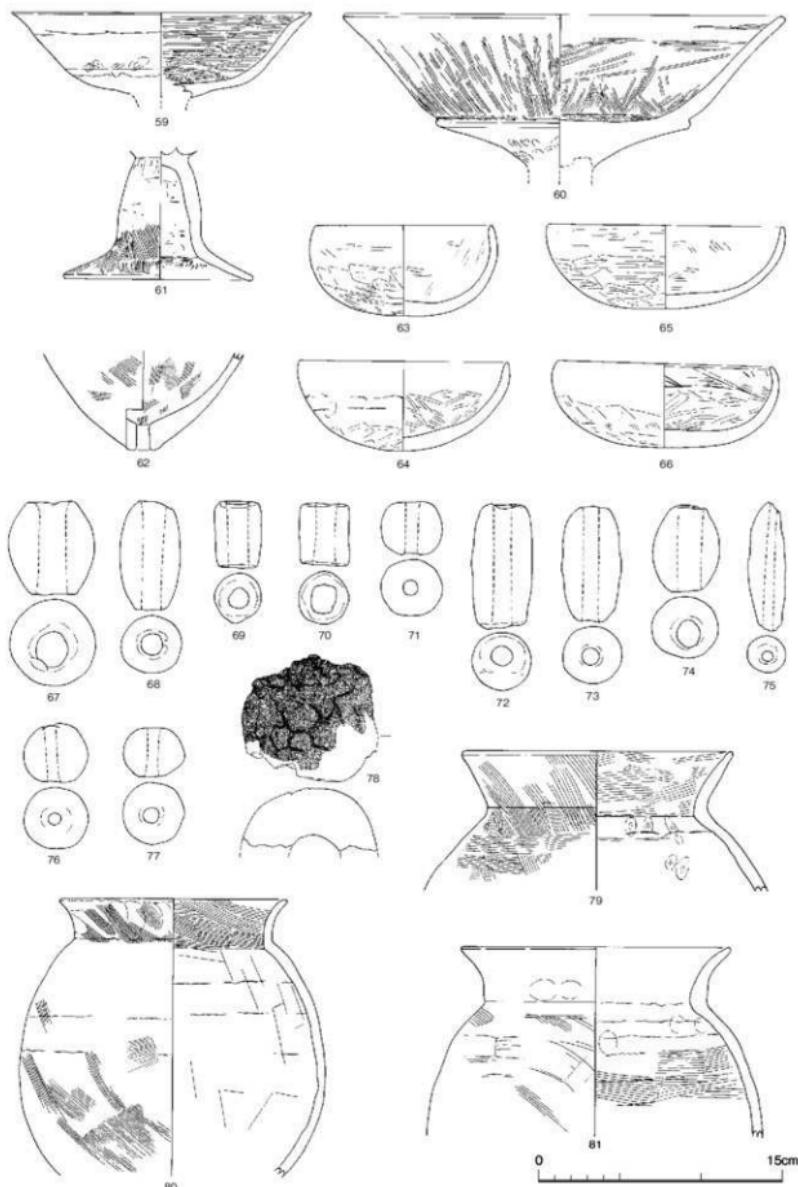
第8図 SK200・P200・SD210出土遺物 [S = 1/3]



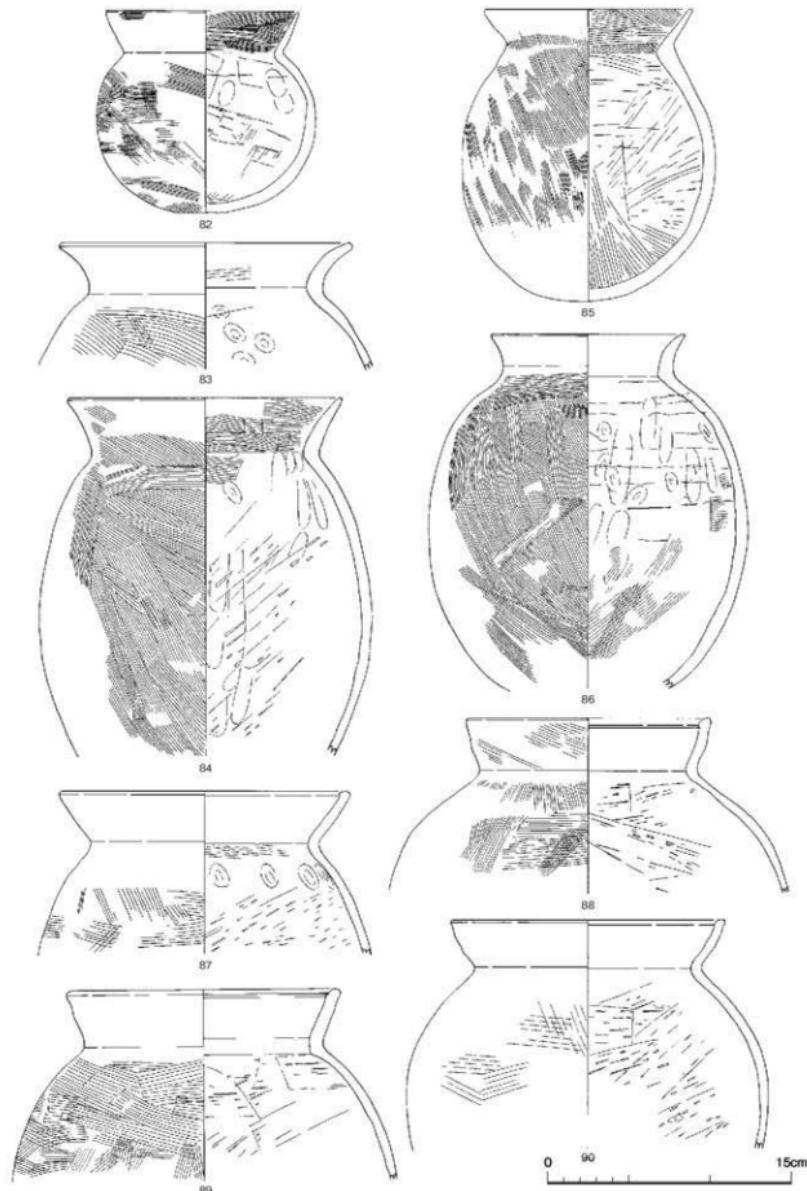
第9図 大河跡 (W25) 出土遺物 [S = 1/3]



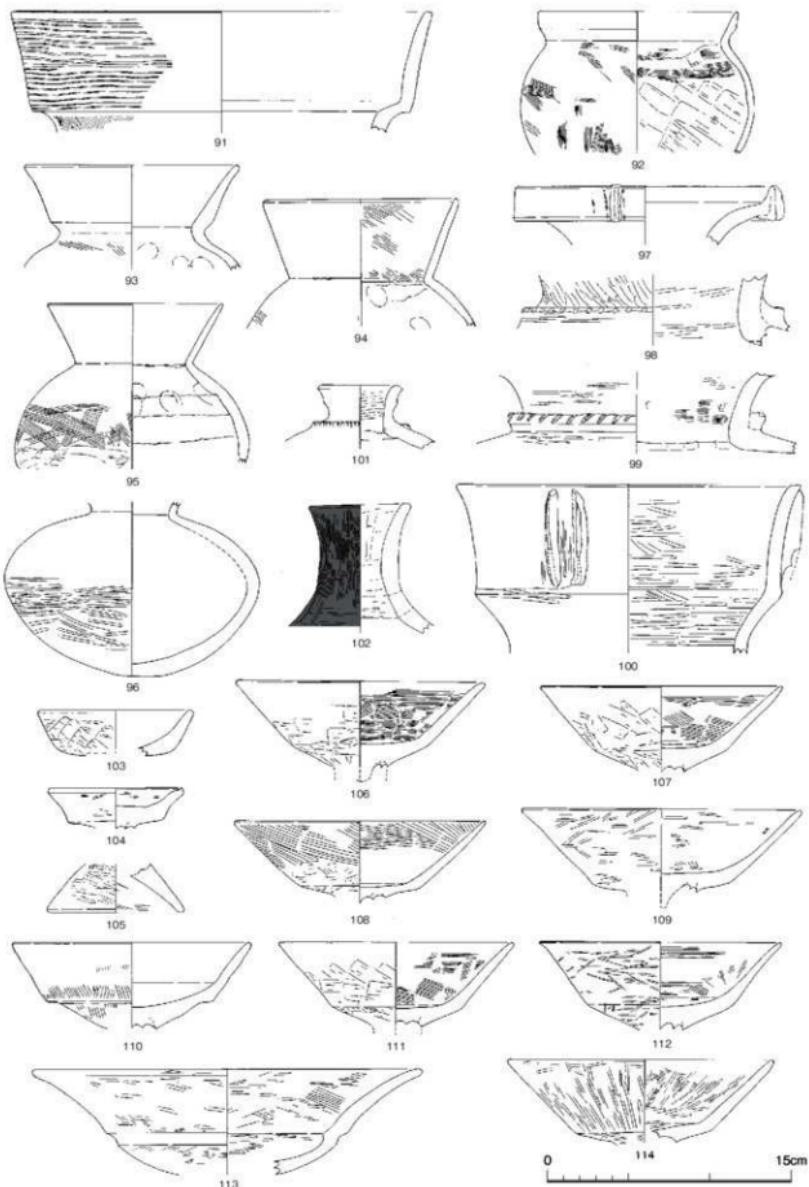
第10図 大河跡(W25)出土遺物 [S = 1/3]



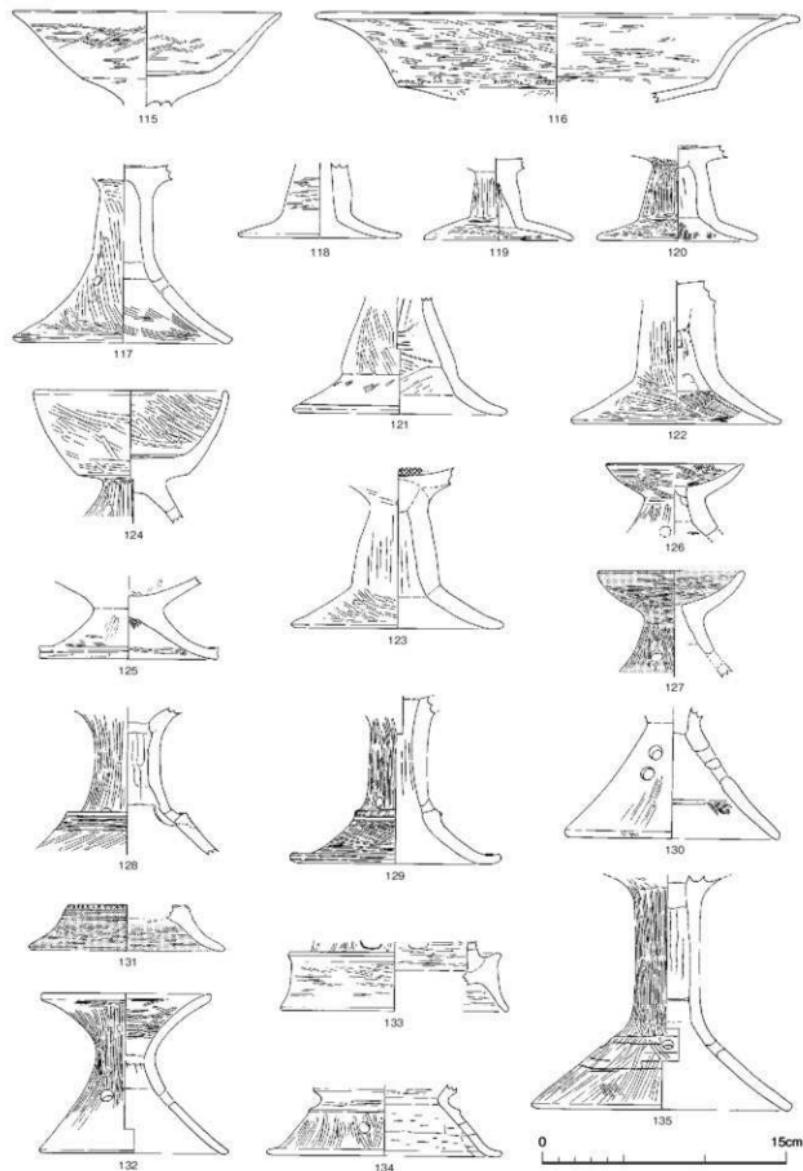
第11図 大河跡 (W25・W24) 出土遺物 [S = 1/3]



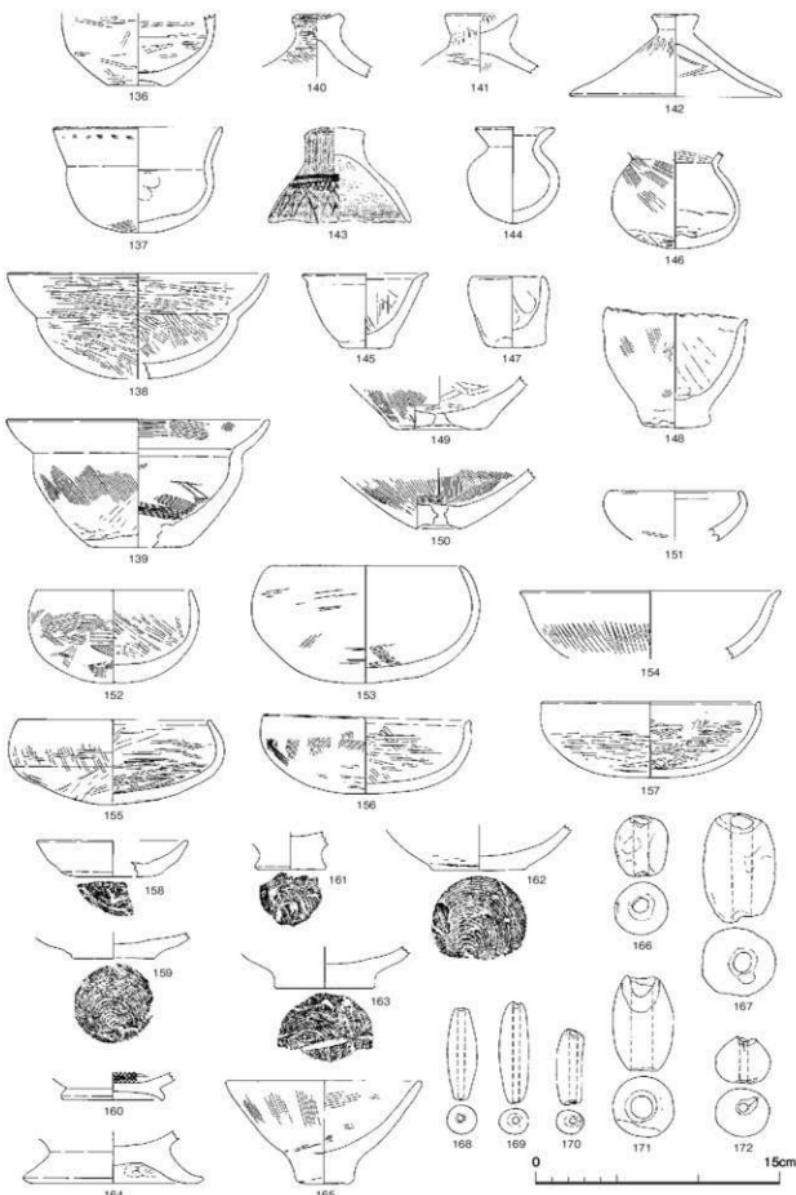
第12図 大河跡(W24)出土遺物 [S = 1/3]



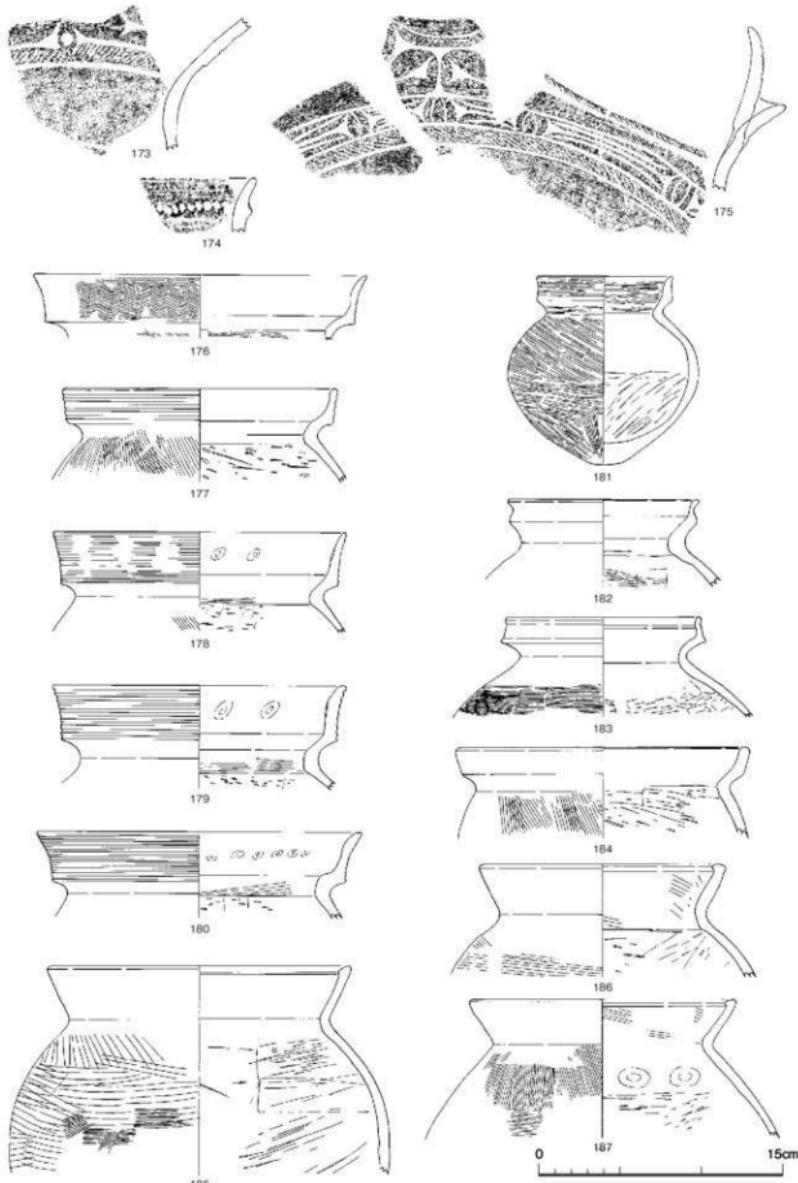
第13図 大河跡(W24)出土遺物 [S = 1/3]



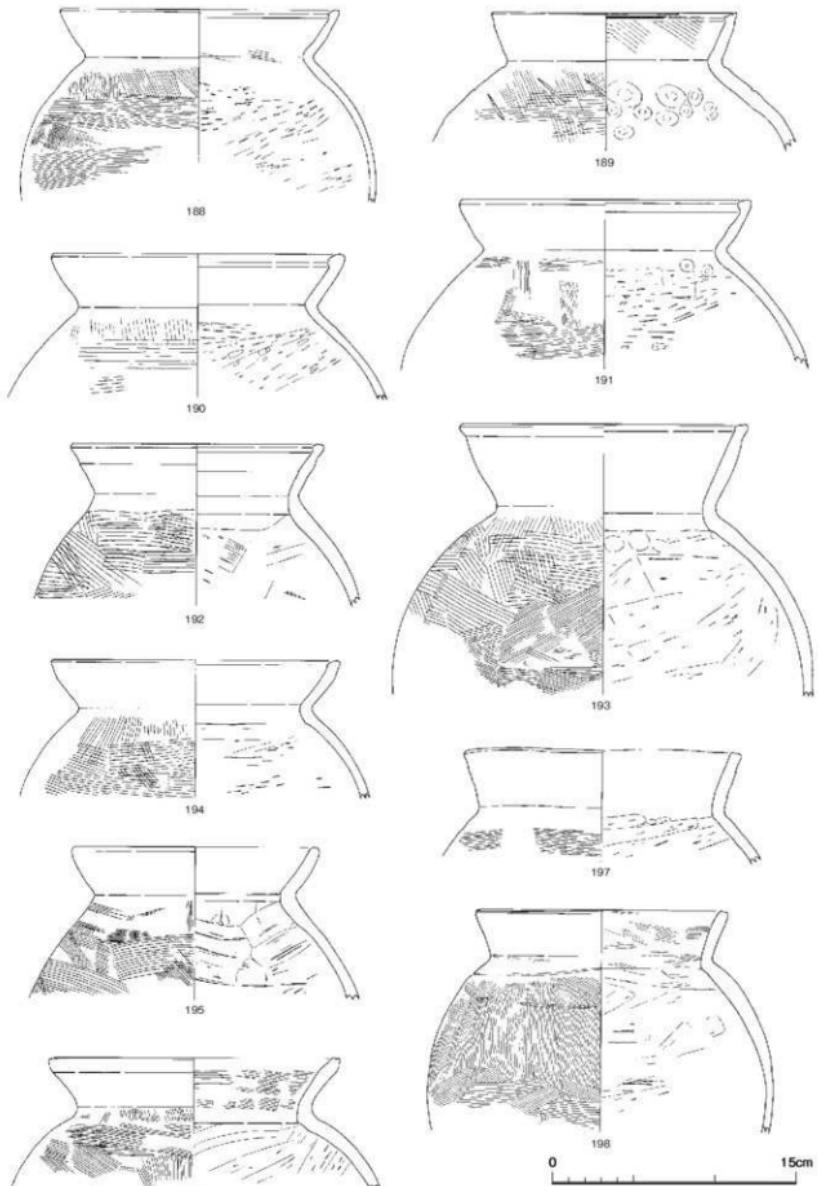
第14図 大河跡(W24)出土遺物 [S = 1/3]



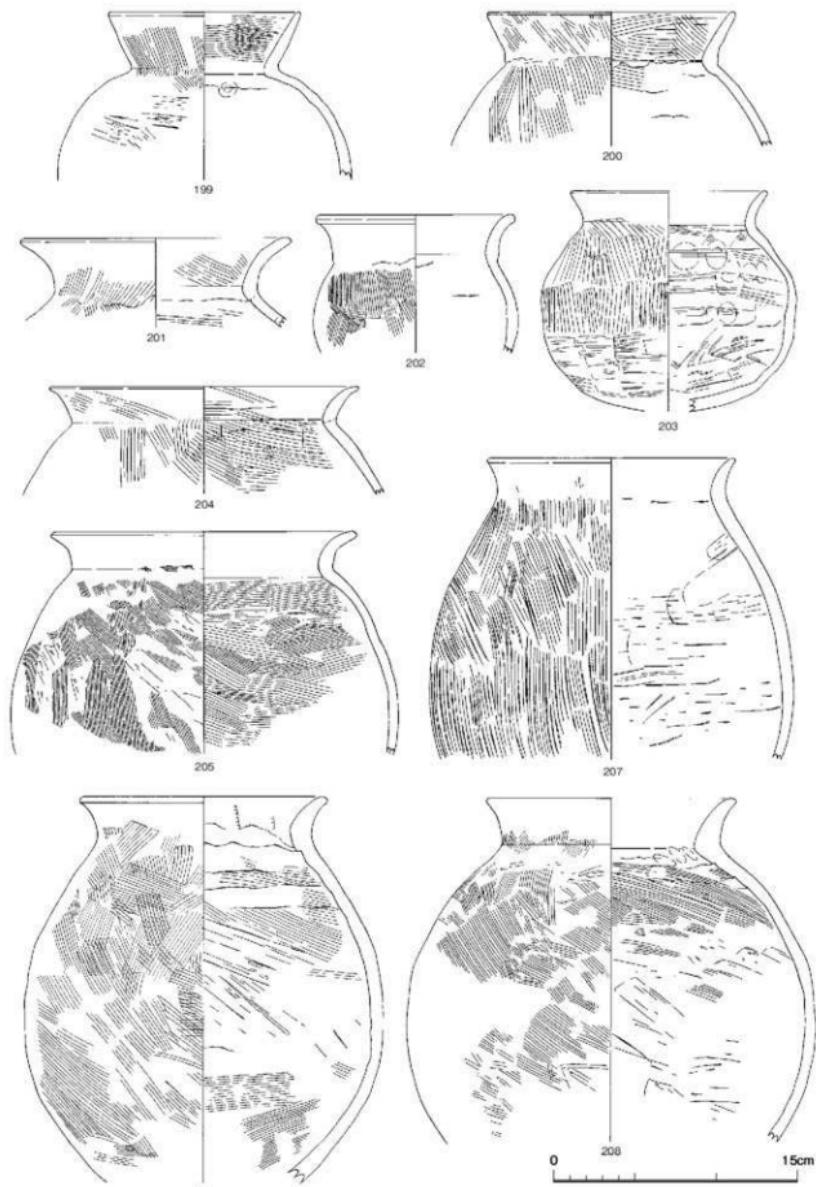
第15図 大河跡(W24)出土遺物 [S = 1/3]



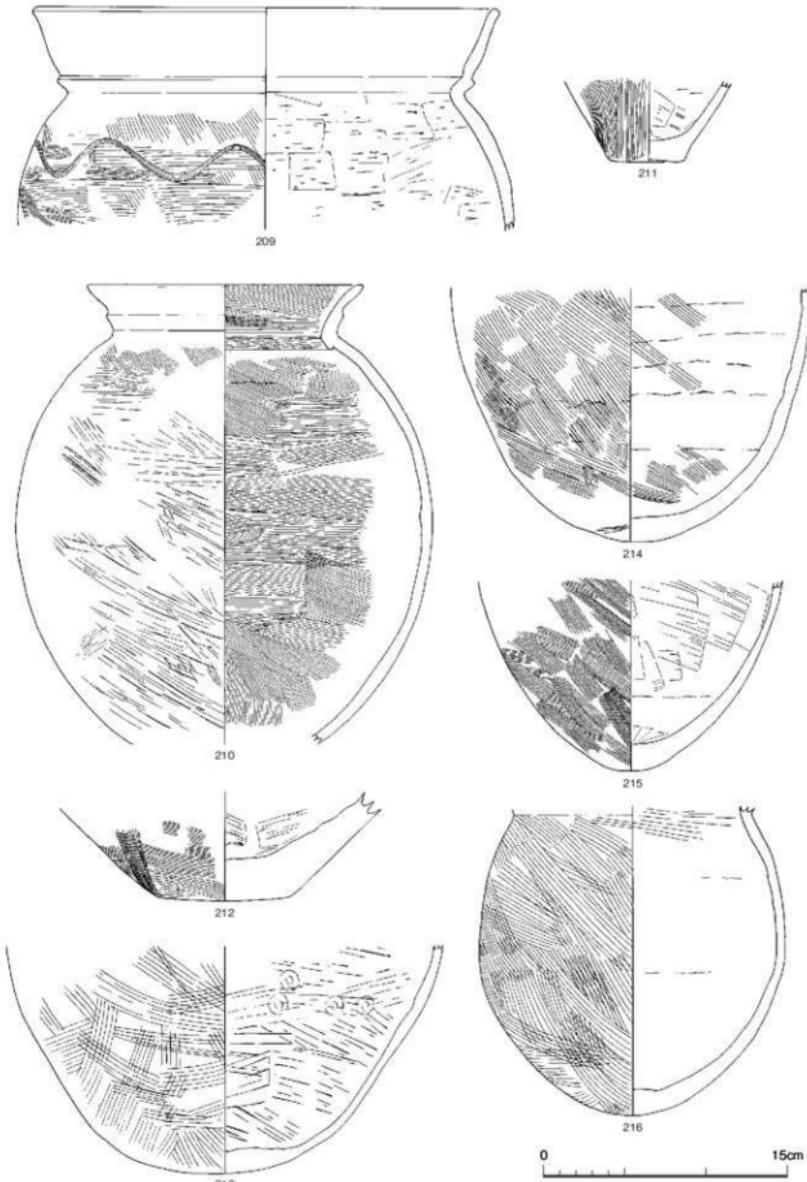
第16図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



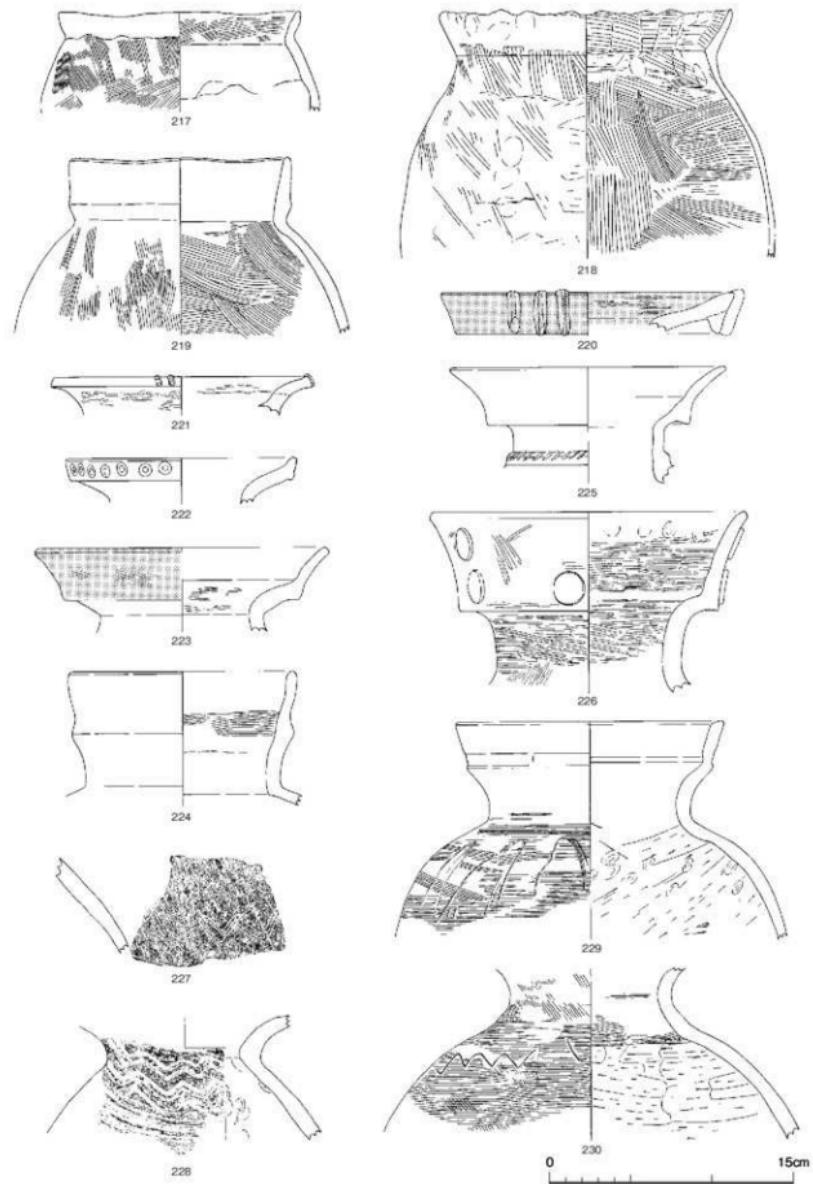
第17図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



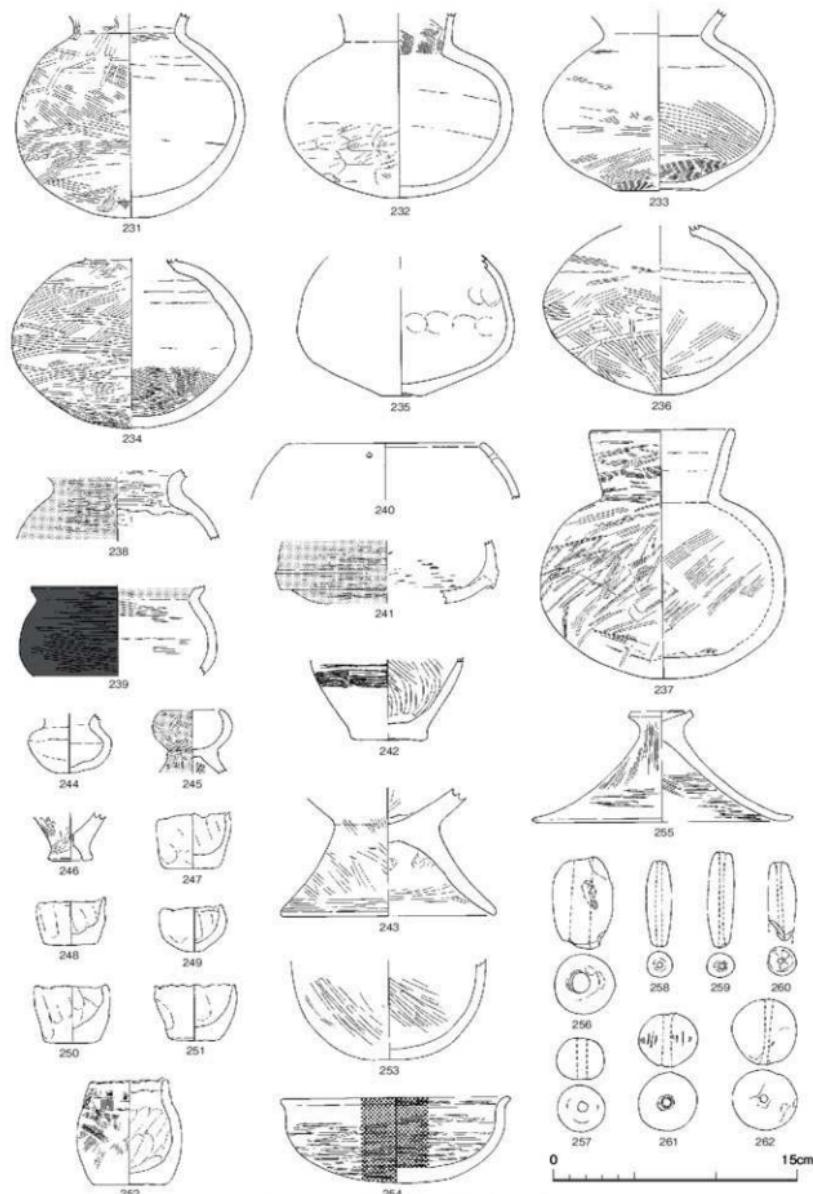
第18図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



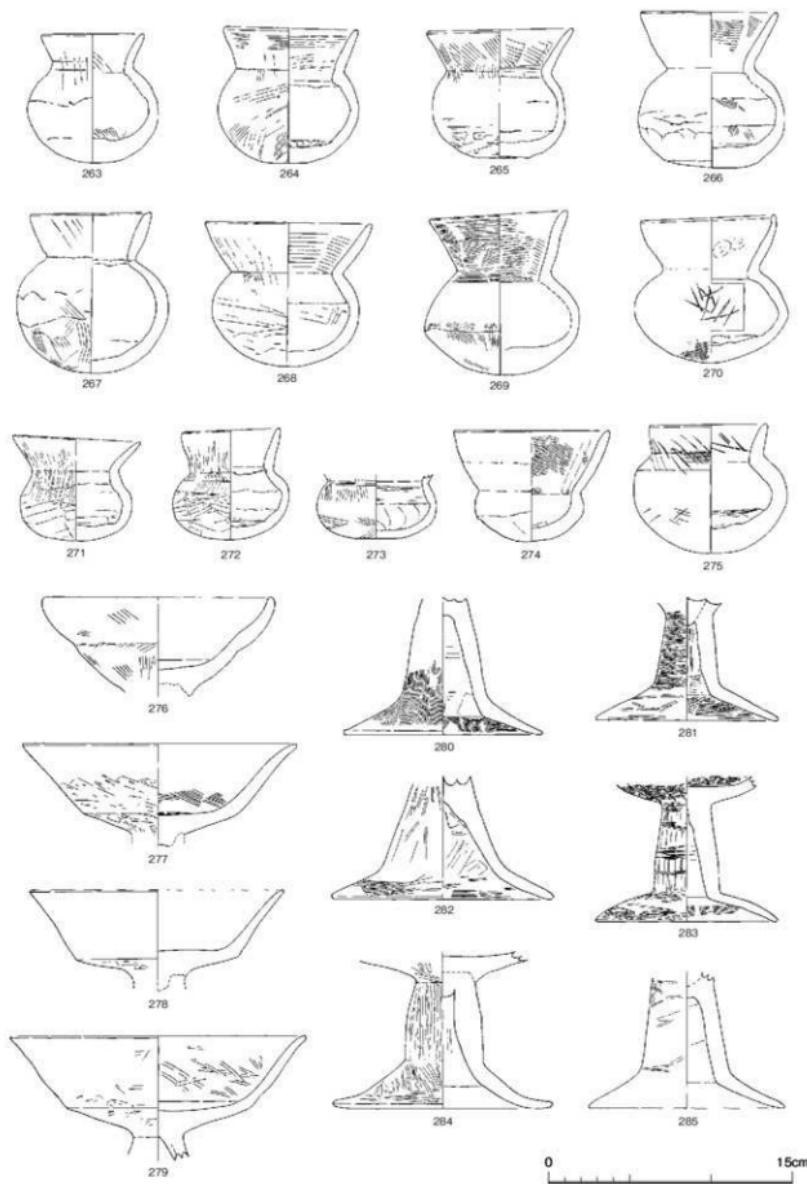
第19図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



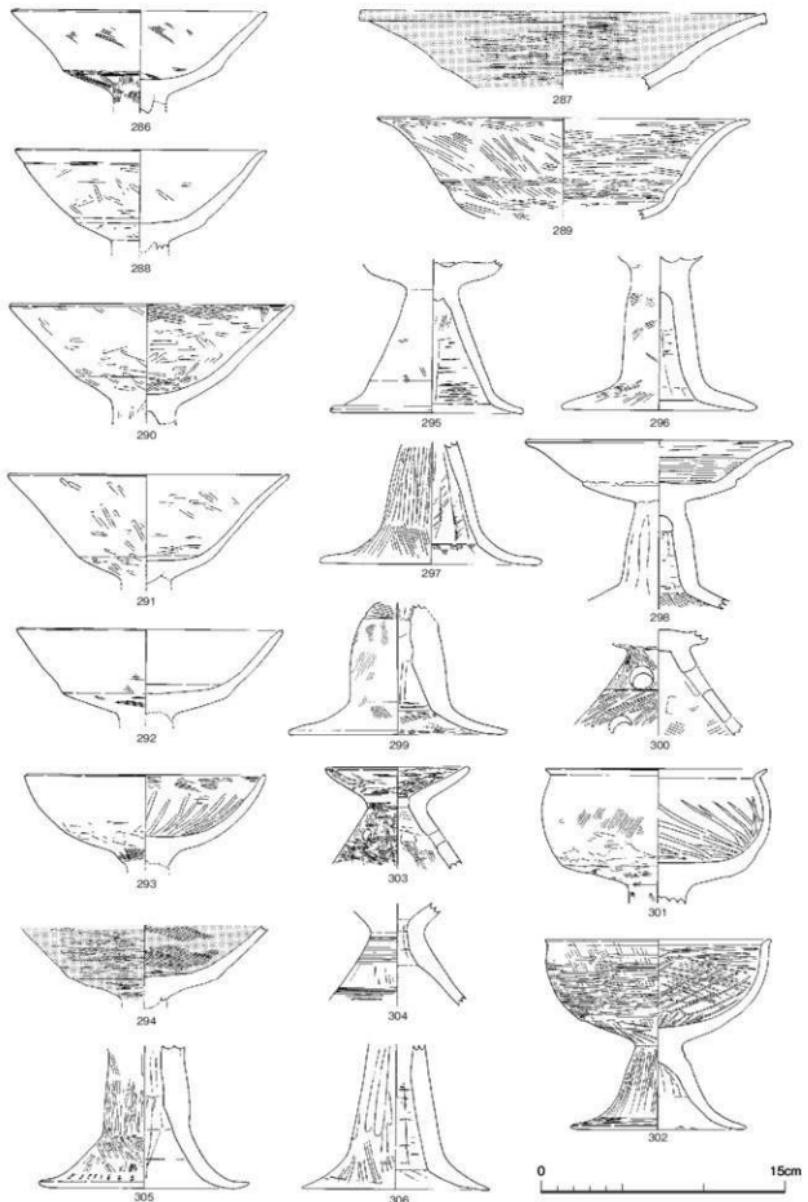
第20図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



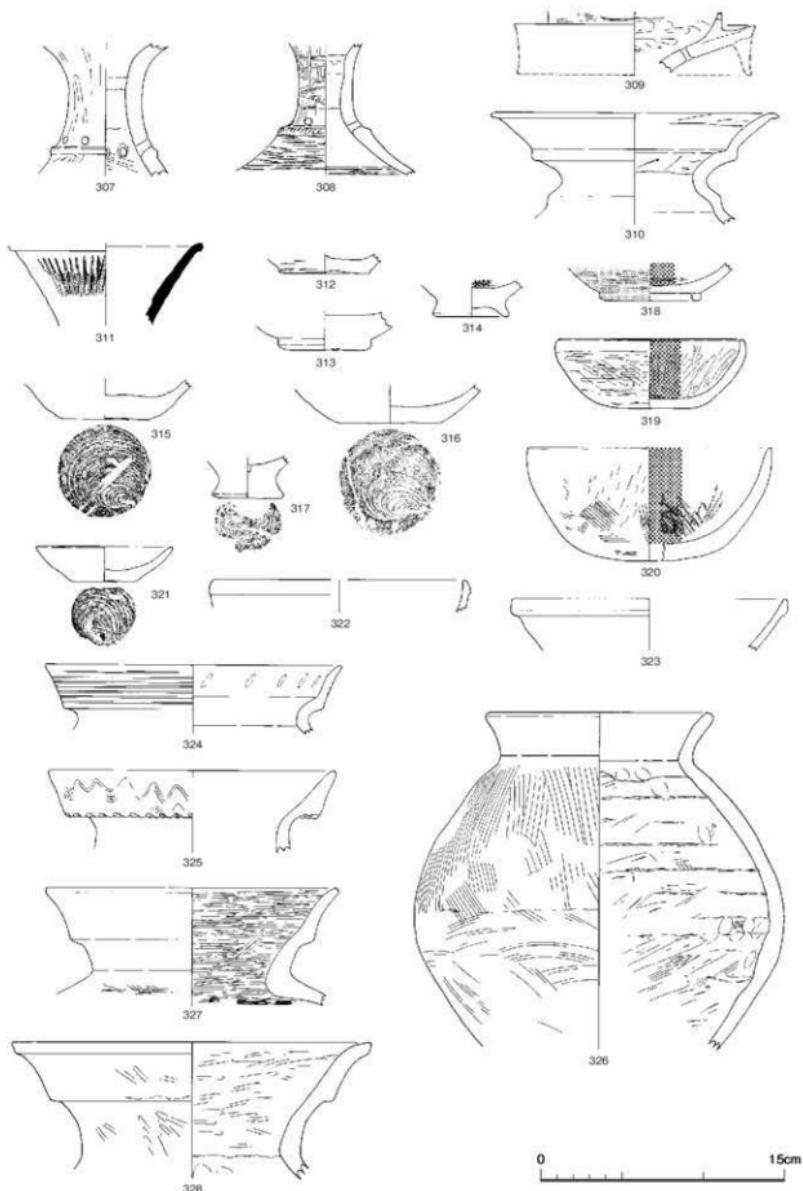
第21図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



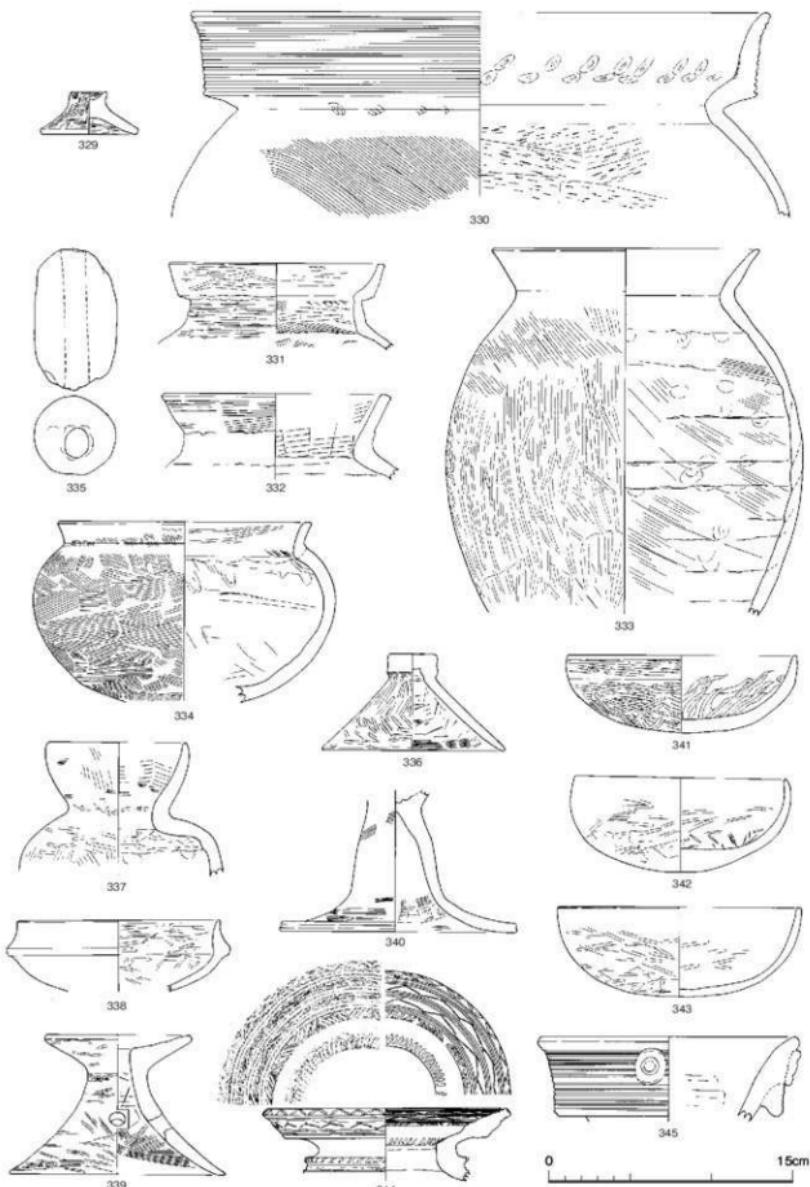
第22図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



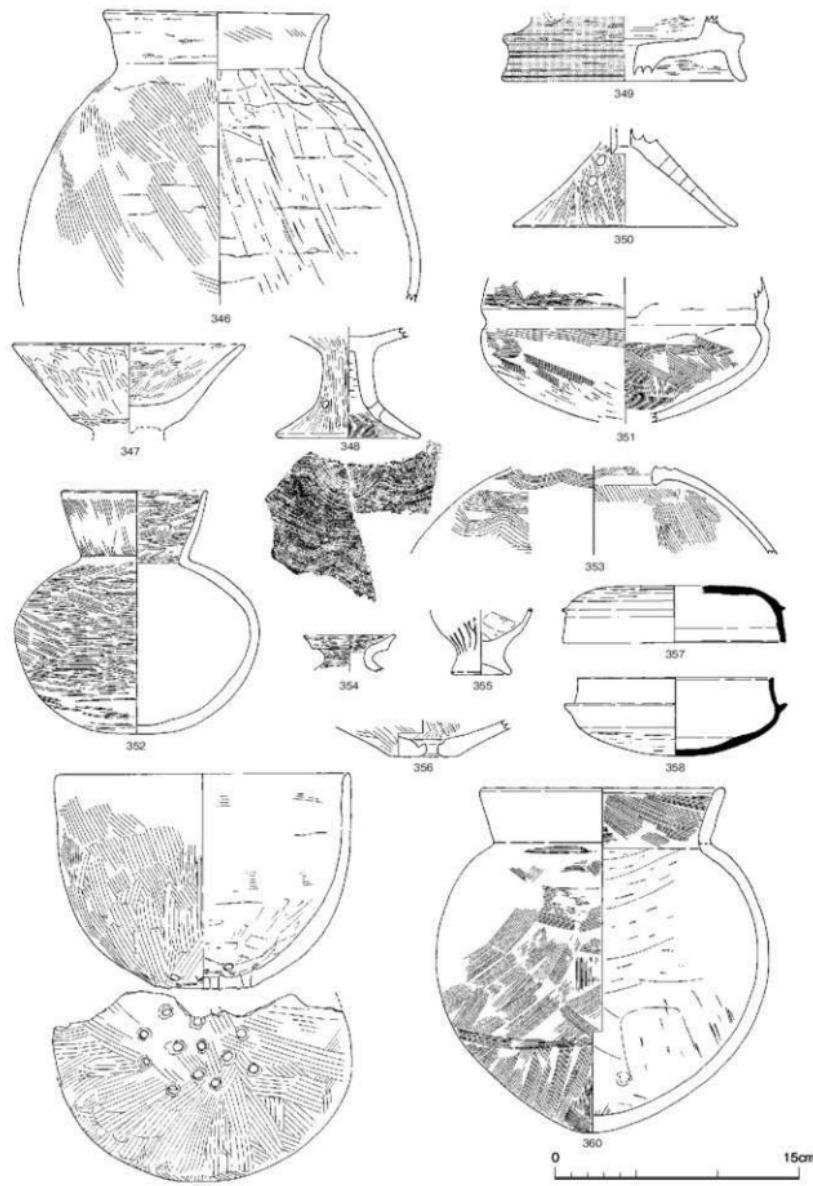
第23図 大河跡(W23)出土遺物 [S = 1/3]



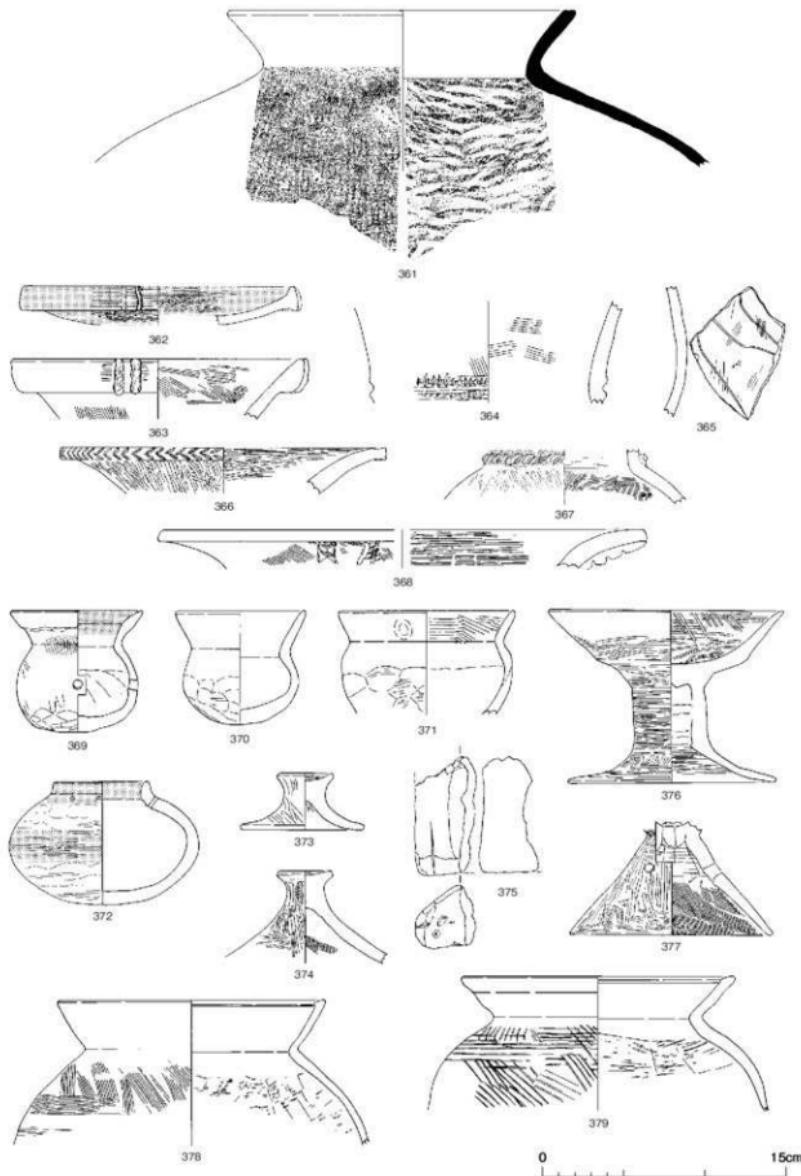
第24図 大河跡 (W23・W22・W) 出土遺物 [S = 1/3]



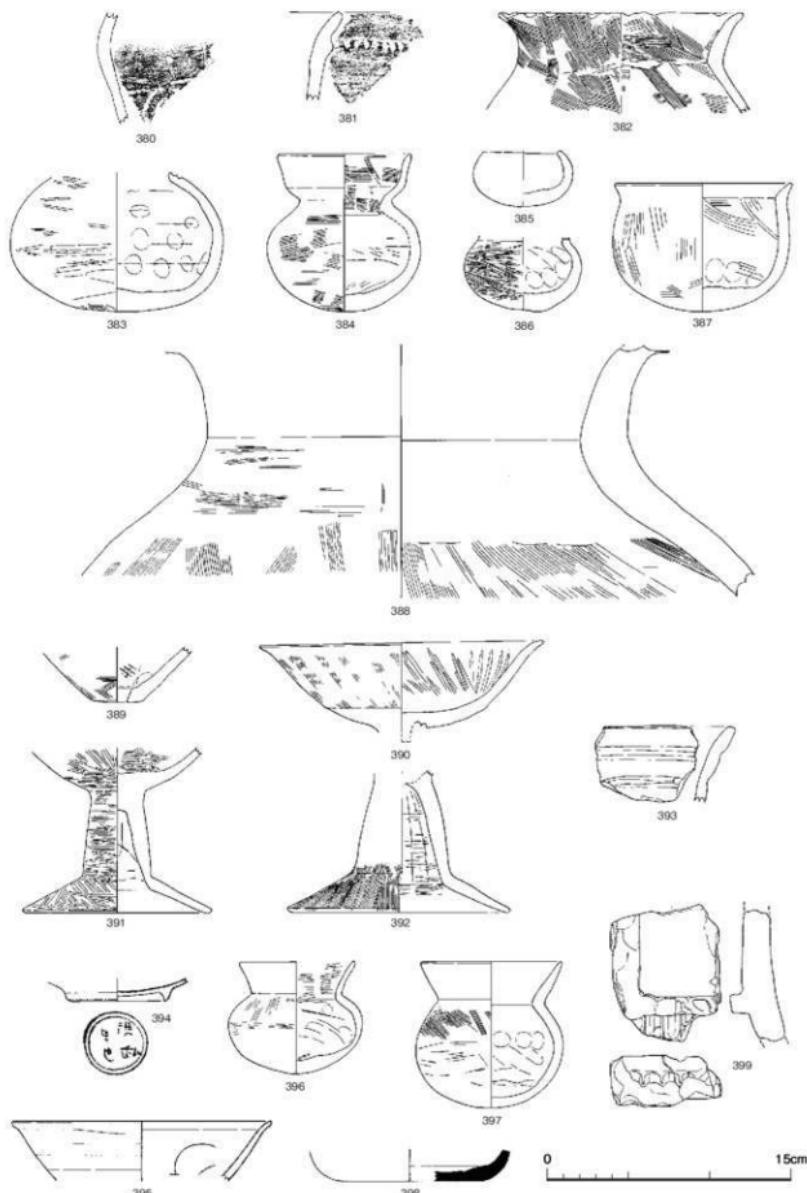
第25図 大河跡 (X24・X22・WX22) 出土遺物 ($S = 1/3$)



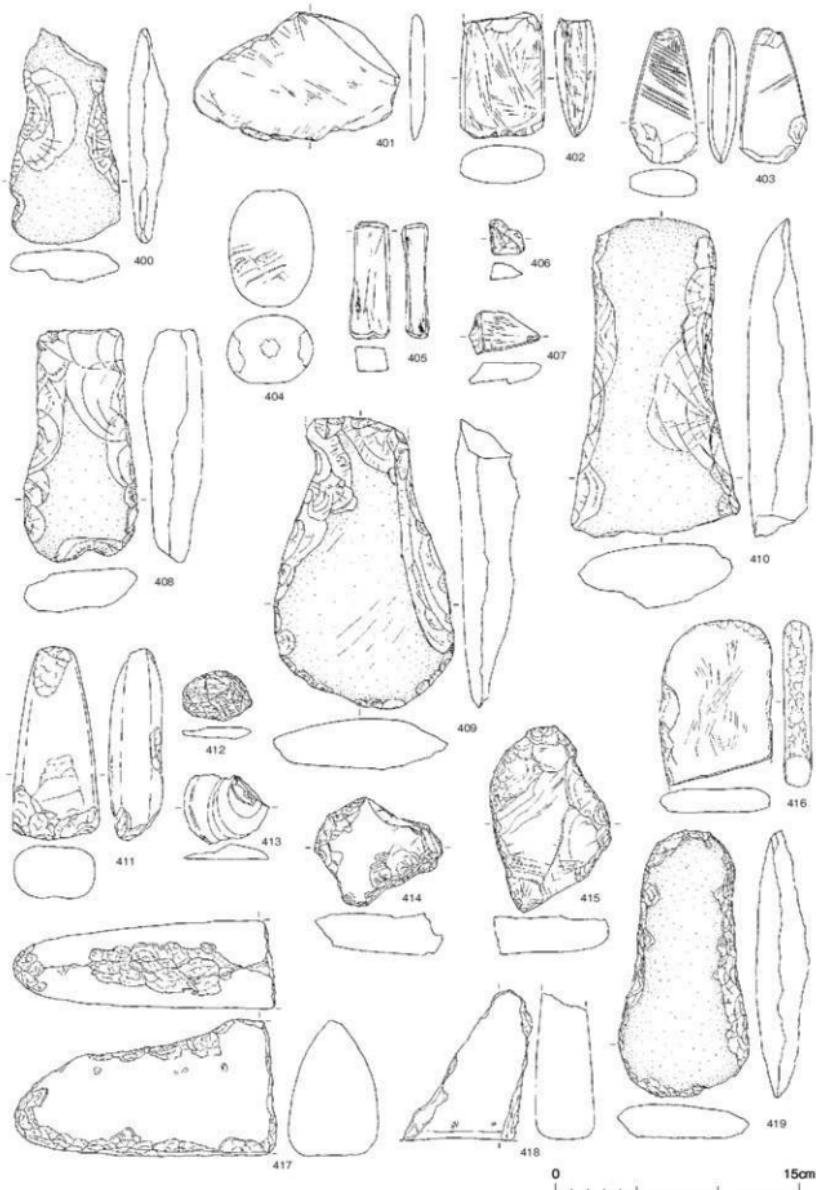
第26図 大河跡 (W-X22・X21・X20・Y22) 出土遺物 [S = 1/3]



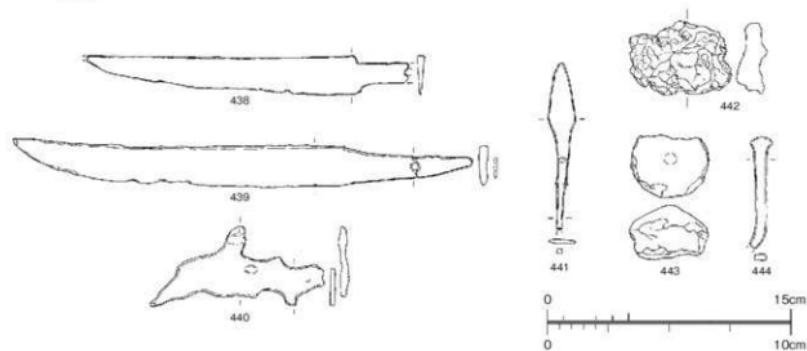
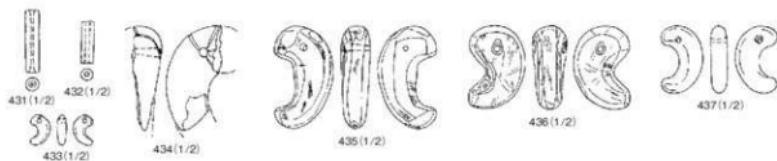
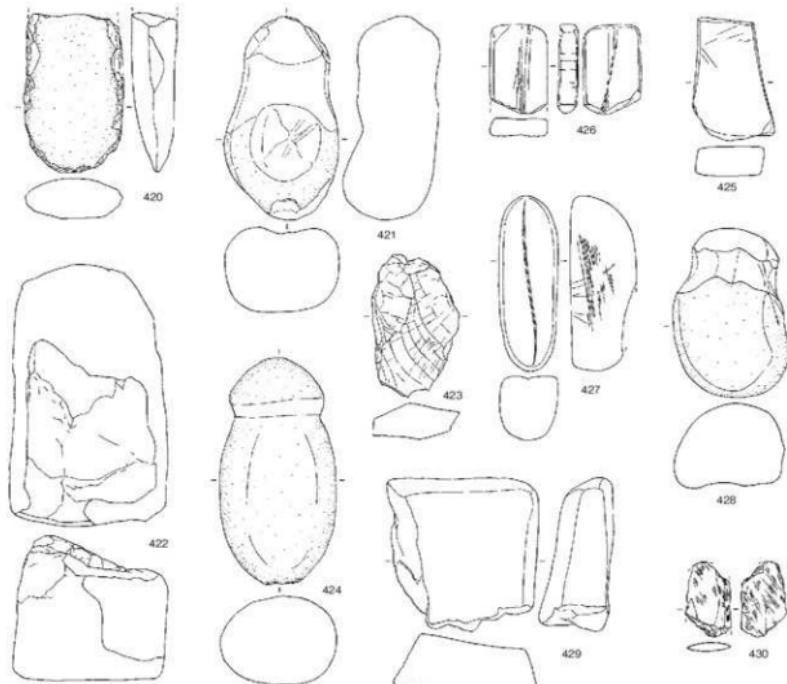
第27図 大河跡（Y22・北半・中央地）出土遺物 [S = 1/3]



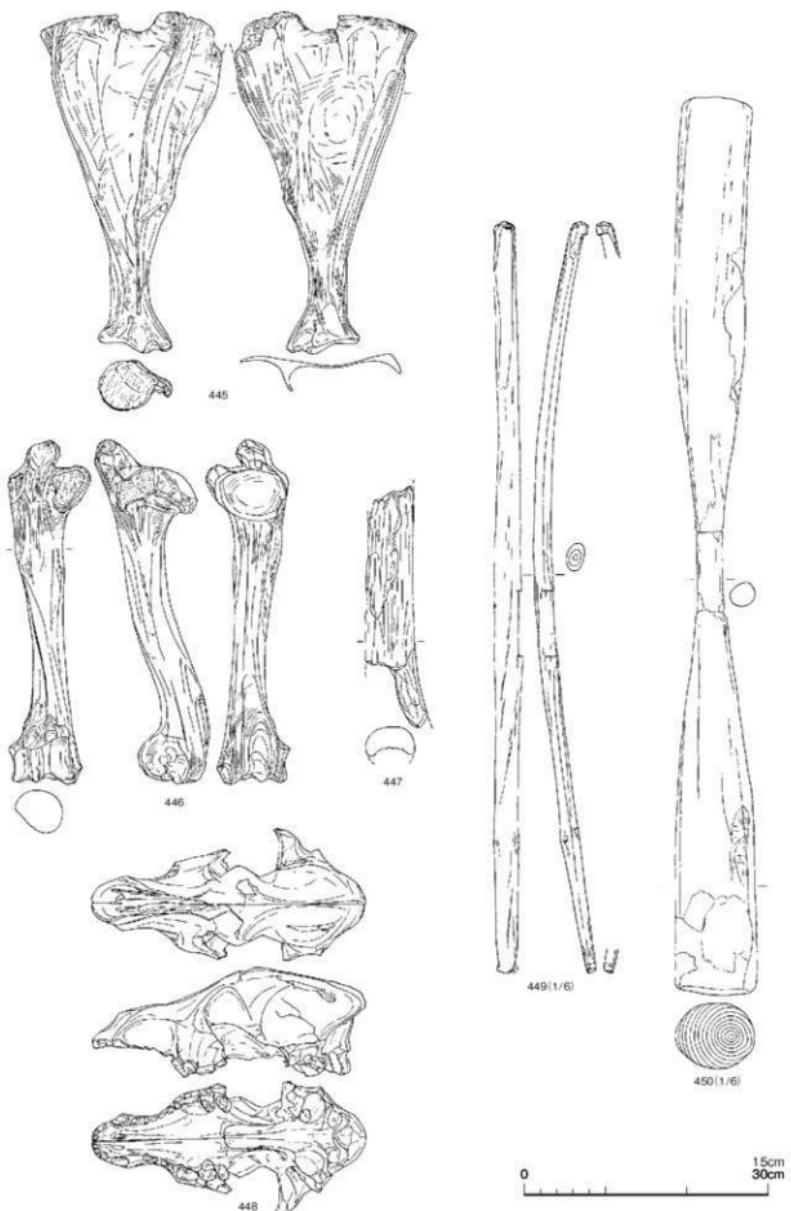
第28図 大河跡（中央窯・南半・不明）出土遺物 [S = 1/3]



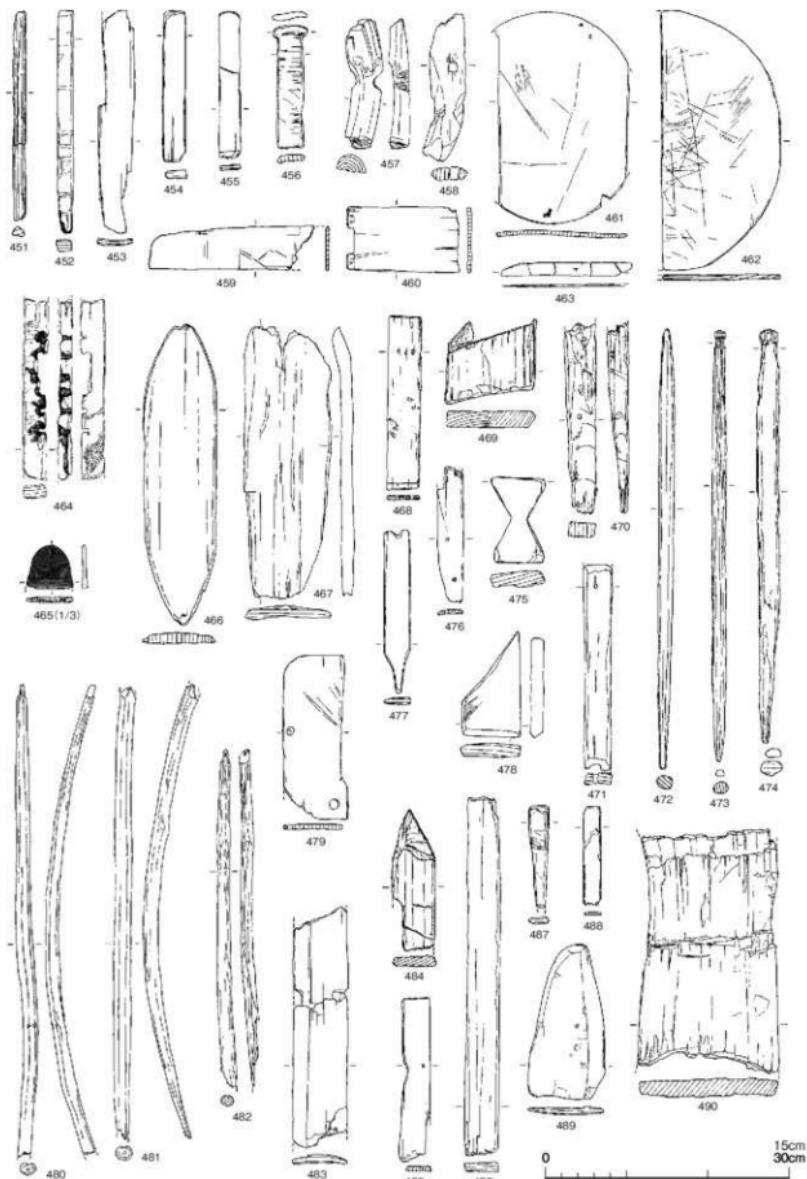
第29図 SD210・大河跡(W25・W24・W23)出土石製品 [S = 1/3]



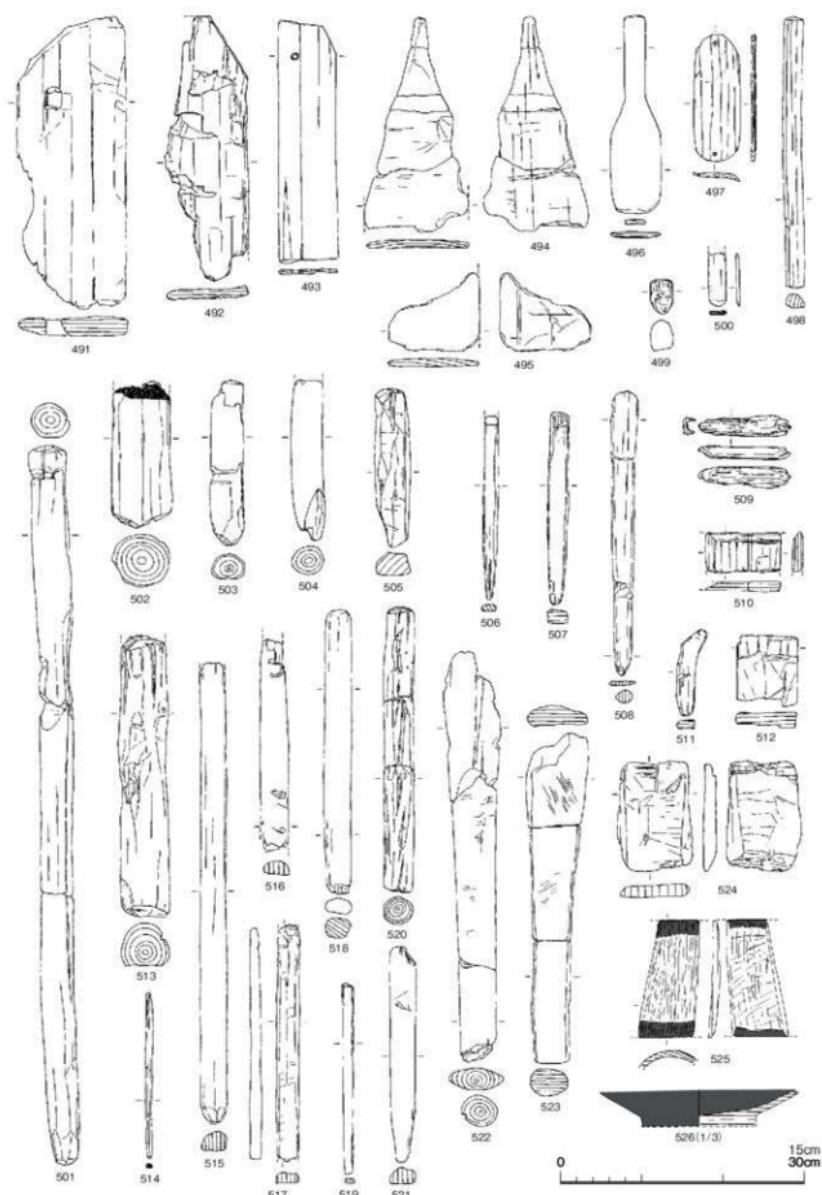
第30図 大河跡(W25・W24・W-X22・X21・北半・中央畦・南半)・SD210・包含層出土石製品・金属製品(S=1/3-1/2)



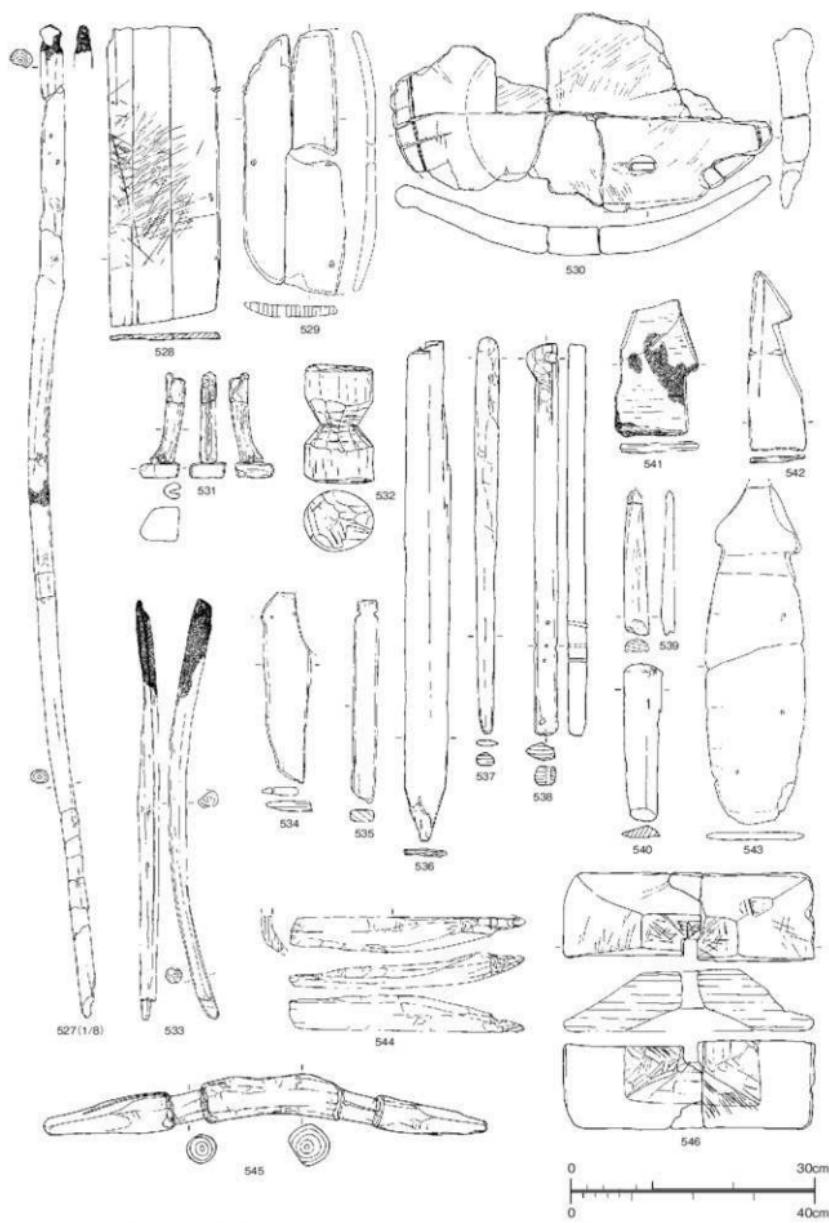
第31図 大河跡(W25・W23)出土骨・木製品 (S=1/3・1/6)



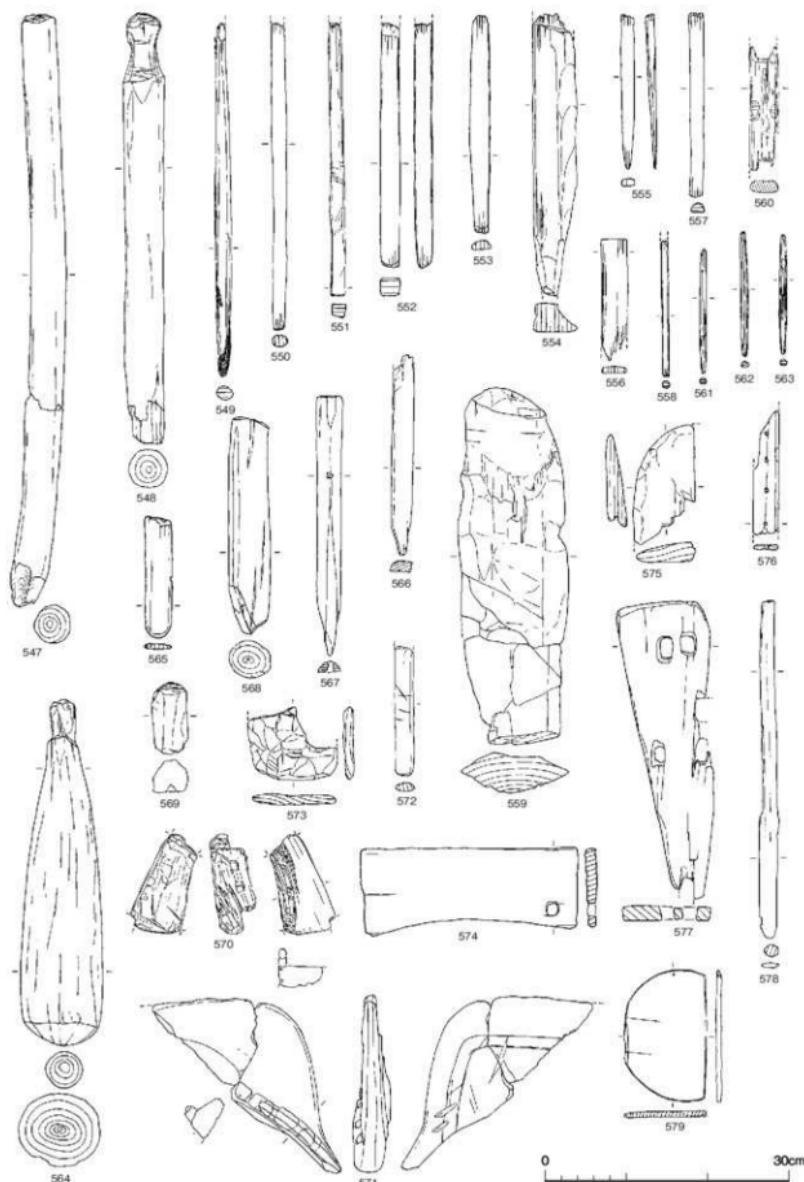
第32図 SD210・大河跡(W25・W24)出土木製品 [S = 1/6・1/3]



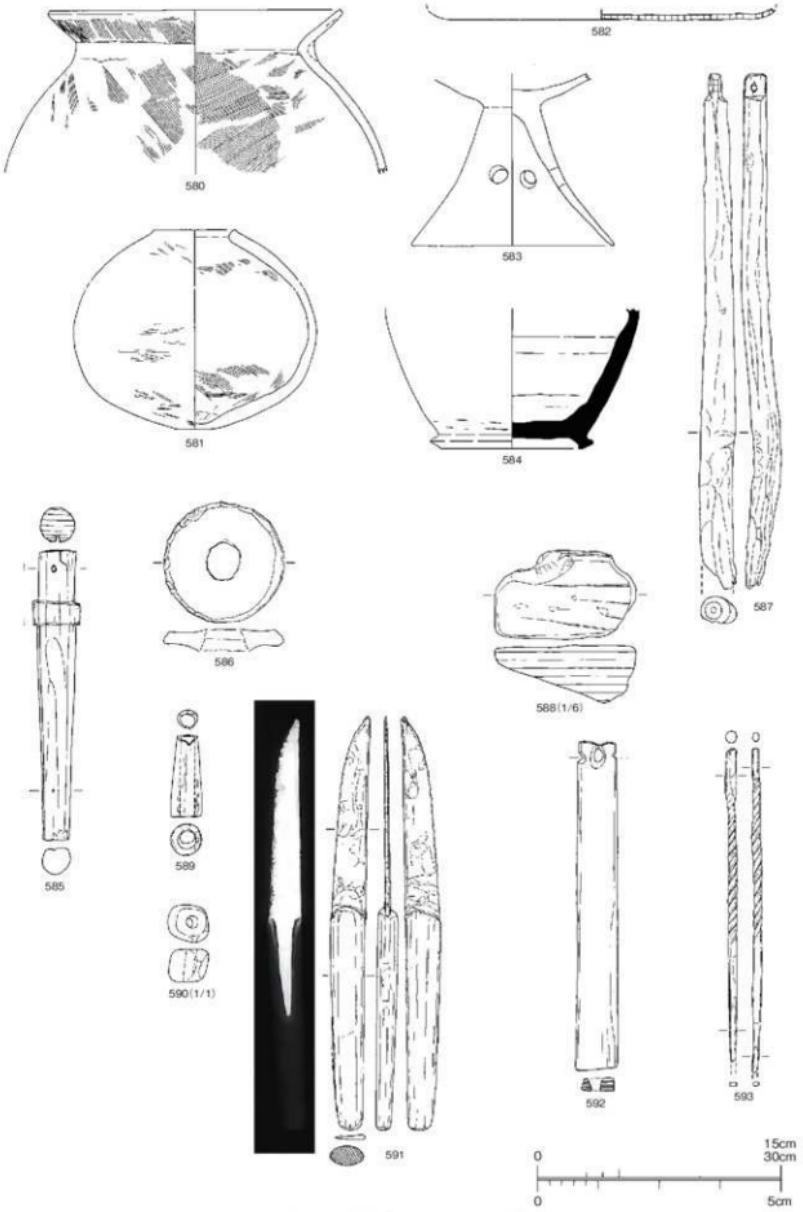
第33図 大河跡 (W24・W23) 出土木製品 [S = 1/6・1/3]



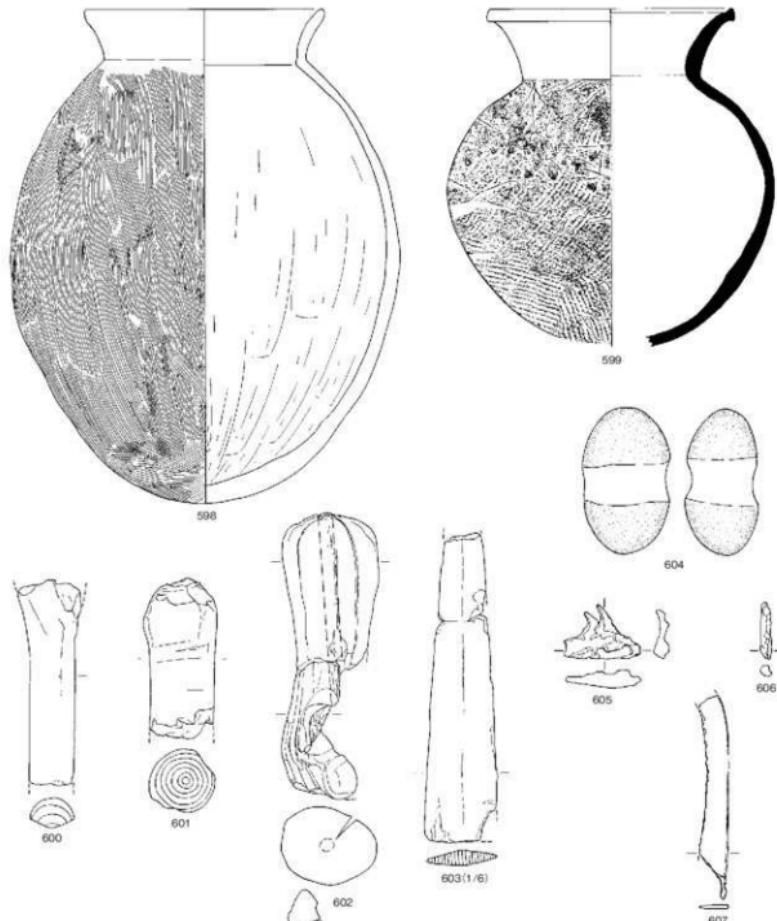
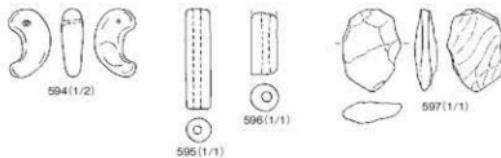
第34図 大河跡 (W24・W23・W22・WX22・X22・X21・Y21) 出土木製品 [S = 1/6・1/8]



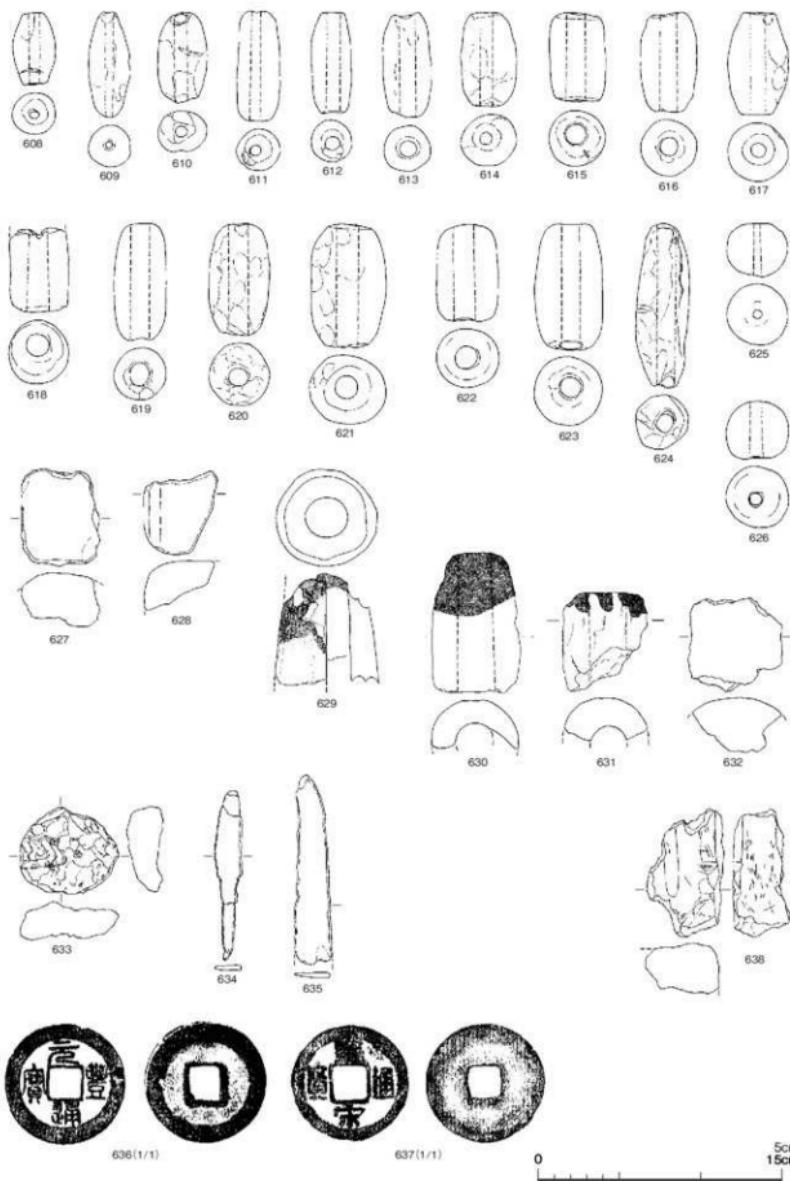
第35図 大河跡 (W25～W21・W-X22・X22・X20・Y22・北半・中央畦・南半) 出土木製品 ($S = 1/6$)



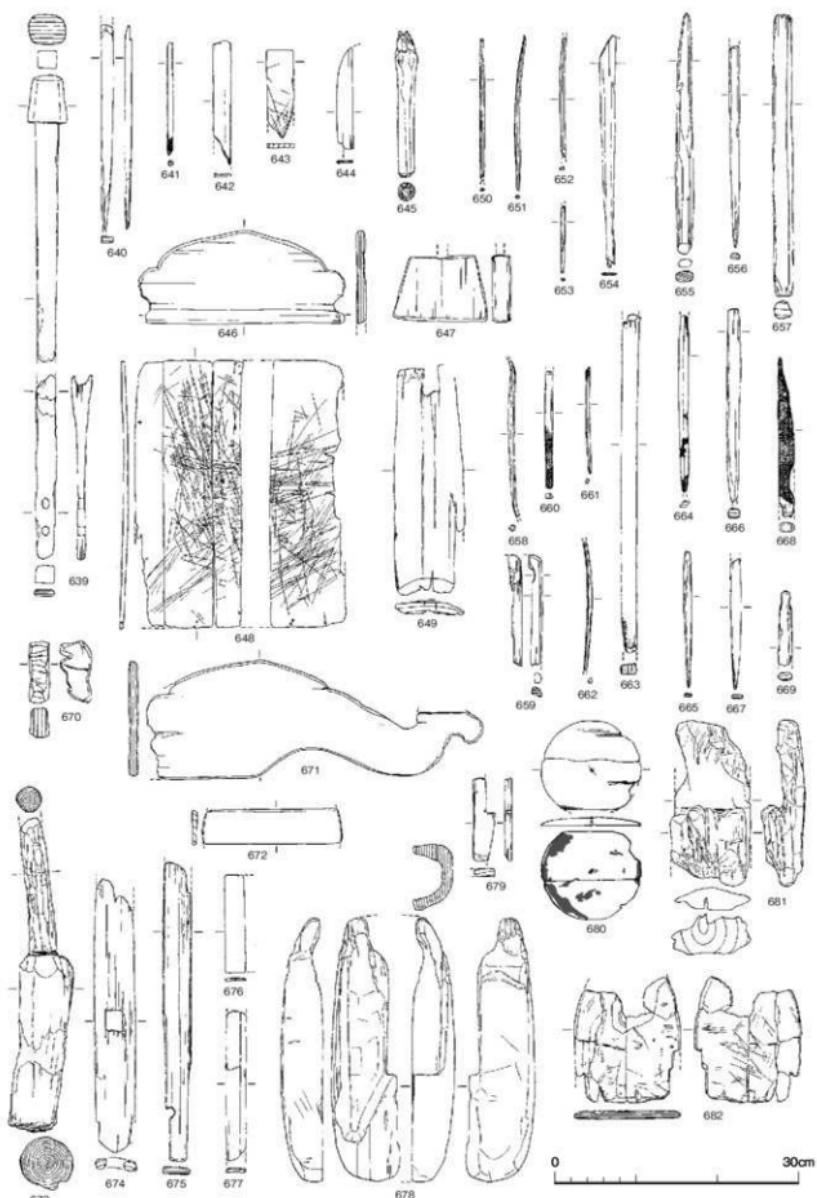
第36図 捕道 [S = 1/3 · 1/1 · 1/6]



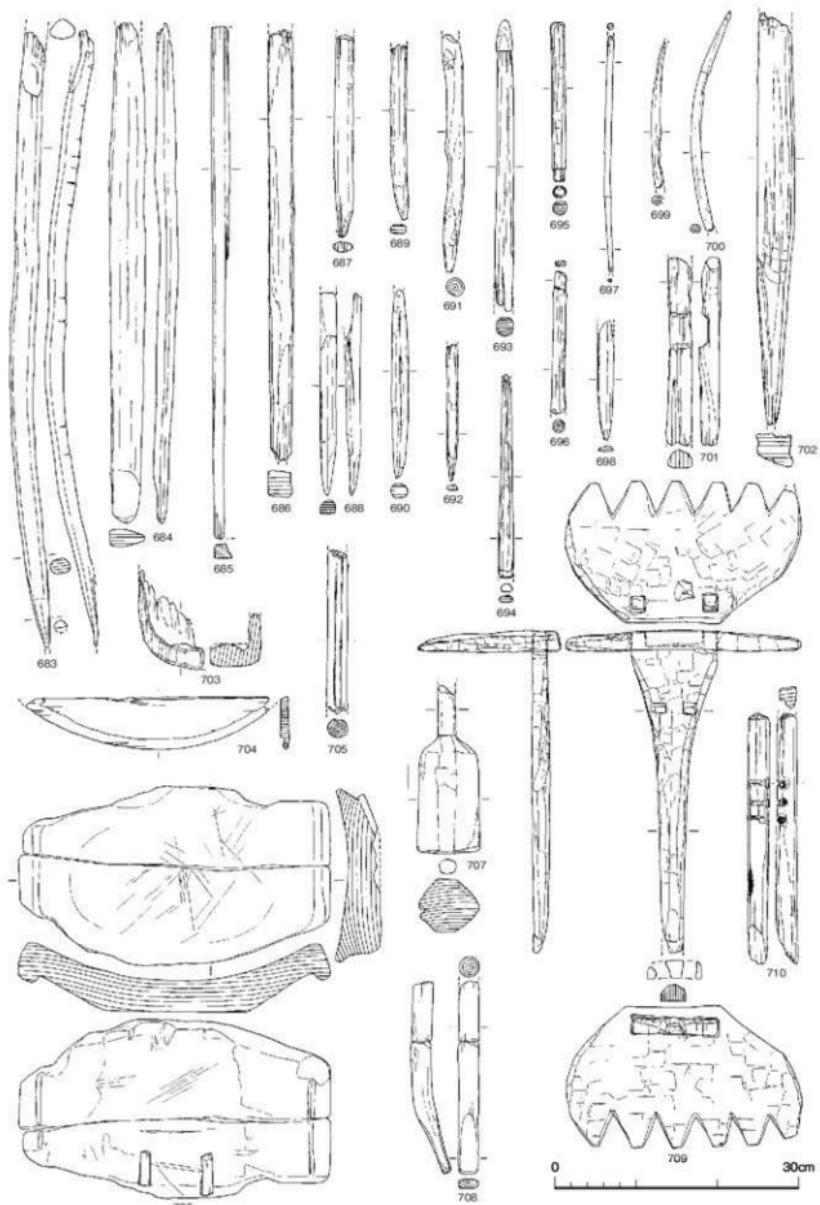
第37図 捕道 [S = 1/3 · 1/1 · 1/2 · 1/6]



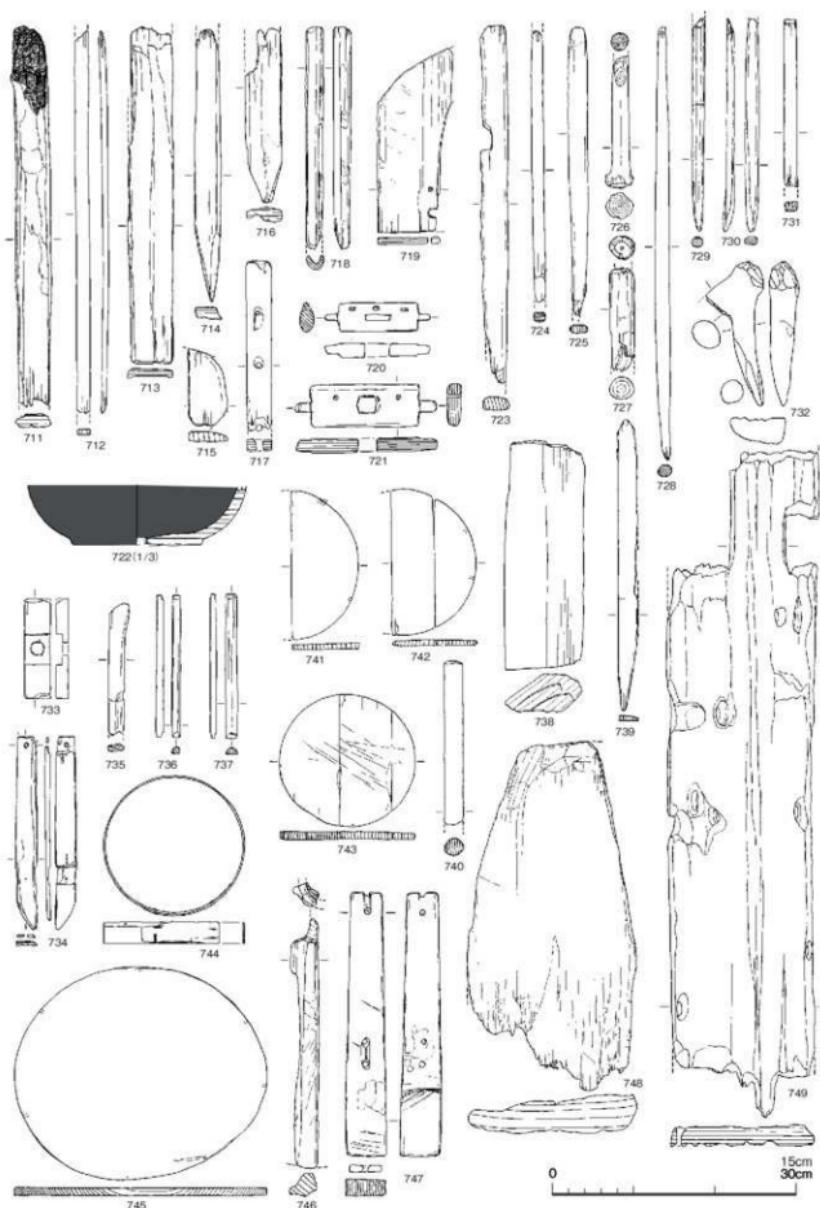
第38図 補遺 [S = 1/3 + 1/1]



第39図 捕道（2区：SD303・SD222・SE251・SD240出土木製品）【S = 1/6】



第40図 捕遺（2区：SD244 出土木製品）[S = 1/6]



第41図 捕道（2区：SD244・SD303出土木製品）〔S = 1/6・1/3〕

因数	番号	遺構	器種	法量 (mm)				底面	土	調査	色調	備考	実測番号			
				口径 長	高さ 幅	納付 幅	底径 幅									
16	176	4E-W20 大河原	土器	203	(39)			口1/12	○ △ ○	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ	7.5YR6-B 明黄褐色		
	177	4E-W20 大河原	土器	166	(57)			144	口2/12	○ △	■	■	■	2.5Y7/4 浅黄色		
	178	4E-W20 大河原	土器	178	(61)			152	口1/12	○ △	△	■	■	10YR6-B 明黄褐色		
	179	4E-W20 大河原	土器	178	(64)			146	口1/12	○ △	△	■	■	10YR3/1 黄褐色		
	180	4E-W20 大河原	土器	195	(53)			161	口1/12	○ △	○	■	■	7.5YR7-B 褐色		
	181	4E-W20 大河原	土器	84	116	117	16	72	変形	○	△	△	△	2.5Y4-4 浅黄色		
	182	4E-W20 大河原	土器	114	(53)			100	口1/12	△	△	ナデ	ナデ	ナデ		
	183	4E-W20 大河原	土器	116	(61)			102	口3/12	△	△	ナデ	ナデ	ナデ		
	184	4E-W20 大河原	土器	176	(56)			156	口3/12	○	○	ナデ	ハケ	ナデ		
	185	4E-W20 大河原	土器	184	(128)			160	口3/12	△	△	ナデ	ハケ	ナデ		
	186	4E-W20 大河原	土器	144	(69)			126	口4/12	△	△	ナデ	ナデ	ナデ		
	187	4E-W20 大河原	土器	160	(85)			134	口4/12	○	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	
17	188	4E-W20 大河原	土器	168	(118)	218		140	口2/12	○	△	ナデ	ハケ	ハケ→ナデ		
	189	4E-W20 大河原	土器	158	(85)			142	口1/12	○	△	ナデ	ハケ	ハケ→ナデ		
	190	4E-W20 大河原	土器	176	(69)			146	口4/12	○	△	○	ナデ	ナデ	ケズリ	
	191	4E-W20 大河原	土器	176	(104)			149	口2/12	○	△	ナデ	ハケ→ナデ	ナデ	ケズリ	
	192	4E-W20 大河原	土器	154	(99)			126	口3/12	○	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ→ナデ	
	193	4E-W20 大河原	土器	172	(167)	257		134	口6/12	○	○	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	
	194	4E-W20 大河原	土器	174	(84)			143	口1/12	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ→ナデ	
	195	4E-W20 大河原	土器	138	(93)			124	口2/12	△	△	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	
	196	4E-W20 大河原	土器	172	(80)			145	口3/12	○	△	ナデ	ハケ	ハケ→ナデ	ケズリ	
	197	4E-W20 大河原	土器	168	(68)			150	口4/12	○	○	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリ	
	198	4E-W20 大河原	土器	147	(136)	212		136	口6/12	△	△	ナデ	ハケ	ハケ	ケズリ	
18	199	4E-W20 大河原	土器	116	(103)	180	90	92	口2/12	○	○	△	△	ナデ	ハケ	
	200	4E-W20 大河原	土器	150	(82)			130	口3/12	○	△	△	ハケ	ハケ	ハケ→ナデ	
	201	4E-W20 大河原	土器	162	(56)			124	口5/12	○	△	△	ナデ	ナデ	ナデ	
	202	4E-W20 大河原	土器	118	(85)	126	100	102	口3/12	○	○	△	ナデ	ハケ	ナデ	
	203	4E-W20 大河原	土器	118	(136)	156	106	106	口6/12	△	△	ナデ	ハケ→ケズリ	ナデ	ハケ→ケズリ	
	204	4E-W20 大河原	土器	188	(66)			162	口3/12	○	△	△	ハケ→ナデ	ハケ	ハケ	
	205	4E-W20 大河原	土器	183	(137)	238	160	160	口12/12	○	△	ナデ	ハケ	ナデ	ハケ	
	206	4E-W20 大河原	土器	151	(236)	220	131	131	口5/12	○	○	△	ナデ	ハケ	ナデ	
	207	4E-W20 大河原	土器	150	186	224	140	140	口3/12	○	△	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリ	
	208	4E-W20 大河原	土器	148	(211)	251	135	135	口7/12	○	△	ナデ	ハケ→ミネ	ナデ	ハケ→ケズリ	
19	209	4E-W20 大河原	土器	280	(137)			243	口3/12	○	△	○	ナデ	ハケ	ナデ	
	210	4E-W20 大河原	土器	168	(283)	256	138	138	口2/12	○	△	△	ナデ	ハケ→ケズリ	ハケ	
	211	4E-W20 大河原	土器	—	(50)		42	直12/12	○	○	△	△	ハケ	ハケ	ケズリ	
	212	4E-W20 大河原	土器	—	(68)		80	80	直4/12	○	○	△	ハケ	ハケ	ハケ→ナデ	
	213	4E-W20 大河原	土器	—	(140)		50	50	直12/12	○	△	△	ハケ→ケズリ	ケズリ	ハケ	
	214	4E-W20 大河原	土器	—	(156)	220	26	26	直5/12	○	△	△	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
	215	4E-W20 大河原	土器	—	(117)		18	18	直12/12	△	△	△	ハケ	ハケ	ハケ→ナデ	
	216	4E-W20 大河原	土器	—	(190)	188	12	146	直12/12	○	○	△	ハケ	ハケ→ナデ	ハケ	
20	217	4E-W20 大河原	土器	146	(61)			141	口2/12	△	○	△	ナデ	ハケ	ハケ	ナデ
	218	4E-W20 大河原	土器	176	(182)	230	160	160	口3/12	△	△	△	ナデ	ハケ→ケズリ	ハケ	ケズリ→ハケ
	219	4E-W20 大河原	土器	132	(106)			130	口3/12	△	○	○	ナデ	ハケ→ナデ	ナデ	ハケ

第3表 土器・土製品調査表(5)

団体	番号	遺構	器種	法量 (mm)							出土	調査	色調	備考	測定号					
				口径	高さ	納量	底径	盤形	直角度	直角度										
28	396	4区 大河原	土器器	70	79	82	7	55	□2/12	△	△	△	ナデ	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	ナデ	7SYR8/4 浅黄褐色	7SYR8/4 浅黄褐色	E220	
	397	4区 大河原	土器器	86	90	91	10	75	□7/12		○		ナデ	ハケ→ナズリ	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄褐色	SYR8/4 浅黄褐色	E220	
	398	4区 大河原	直腹盆 無耳杯	(20)		96	直5/12	○	△				ロクロナデ	ロクロナデ	ハラシ→ナデ		SYB8/2 灰白色	SYB8/2 灰白色	1404	
	399	4区 大河原	瓦罐	(B4)	(67)	(27)				壁片	○	△○					2.5YB-3 淡黄色	翠青色 丸瓦	S496	
36	580	4区 SD236	土器器	178	(192)				□3/12	○	△△	△	ハケ	ハケ→ナデ	ナデ	ハケ	灰灰褐色	灰灰褐色	F288	
	581	4区 SD236	土器器	49	123	150	34		□1/12	○	△	△	エガキ?	エガキ?	エガキ?	ナデ	ハケ→ナデ ケスリ	灰灰褐色	F289	
	583	15 上野高尾	(SD228)	(105)		123	35	直3/12	○	△	△	岸底	岸底	岸底	岸底	一側灰白色 内面黒褐色	一側灰白色 内面黒褐色	F287		
	584	1段 A166 直腹盆	土器器	(65)		100		直10/12	○	△			ナデ→ナズリ	ナデ		灰色	灰	灰灰褐色 灰白 灰10.5mm	N5	
	586	35 Y16 SD222	直腹盆	74	74	31			变形	○	○	△					灰褐色	灰褐色	T262	
	589	35 SD222	注口	70	19	19			变形								灰灰褐色 灰褐色	灰灰褐色	T263	
	598	手取河川下流域 4区 SD240	土器器	148	305	240	15	124	□1/12 同3/12	○	○	○	ナデ	ハケ	ナデ	ナズリ			T2	
	599	手取河川下流域 4区 SD240	土器器	150	(209)	201			□6/12	△			ナデ	タタキ	ナデ	ナデ			T1	
37	600	2区 SD240	土器	45	26	26			ほぼ定形	○							灰褐色	紫2.5E-6 灰2.0mm	Q63	
	609	2区 SD240	土器	65	26	26			ほぼ定形	○		△					2.5Y7-3 淡黄色	紫35.7g 灰4.4mm	T424	
	610	2区 SD240	土器	56	30	25			变形	△	○	△					10YR7/3 灰褐色	紫33.2g 灰6.0mm	T425	
	611	2区 SD240	土器	68	27	26			ほぼ定形	○		△					10YR8/2 灰白色	紫50.5g 灰7.7mm	T426	
	612	2区 SD240	土器	62	26	26			变形	△							灰灰褐色	紫41.0g 灰6.0mm	Q62	
	613	2区 SD240	土器	64	30	30			变形	○							灰褐色	紫43.3g 灰8.0mm	Q63	
	614	2区 SD240	土器	58	35	31			变形	○	△						10YR6/3 灰褐色	紫42.3g 灰8.0mm 灰黑色	T427	
	615	2区 SD240	土器	55	35	34			变形	△		△					BYR7/6 褐色	紫36.2g 灰11.0mm	T430	
	616	2区 SD240	土器	61	35	36			变形	○	△	△					10YR7/3 灰褐色	紫42.7g 灰11.0mm 灰黑色	T429	
	617	2区 SD240	土器	63	37	37			变形	○							灰褐色	紫33.0g 灰0.0mm	Q64	
	618	2区 SD240	土器	(52)	36	39			文様	△		△					10YR7/4 灰褐色	紫56.5g 灰14.0mm	T431	
	619	2区 SD240	土器	72	32	32			ほぼ定形	○	△	△					2.5YR7/4 灰褐色	紫60.1g 灰12.0mm	T428	
38	620	2区 SD244	土器	69	37	37			变形	○	△						清褐色	紫65.0g 灰13.0mm	Q65	
	621	2区 SD244	土器	76	46	42			变形	○	△						清褐色	紫71.0g 灰11.0mm	E111	
	622	2区 SD244	土器	60	38	36			变形	△	○						深黄褐色	紫81.7g 灰10.0mm	E112	
	623	2区 SD244	土器	78	42	42			变形	○	○	○					深黄褐色	紫125.0g 灰12.0mm	E113	
	624	2区 SD244	土器	102	34	32			变形	△	○	○					難焼灰褐色	紫172.0g 灰12.0mm 灰黑色	E113	
	625	2区 SD244	土器	38	37	32			变形	△	△						難焼褐	紫35.1g 灰1.7mm 外底深灰色	E110	
	626	2区 SD244	土器	38	34	30			变形	△							深黄褐色	紫39.8g 灰6.0mm	E109	
	627	35 Y16 SD222	縹口	(56)	(46)	(30)			縋片								難4.6g		T265	
	628	35 Y16 SD222	伊留?	(51)	(45)	(22)			縋片								難44.0g		T264	
	629	2区 SD240	縹口	(69)	(63)	(60)			縋片	○		○					2.5YB-2 灰白色	10YR9/4 浅黄褐色	T432	
	630	2区 SD244	縹口	(87)	53	(30)			文様	△	△	△					深褐褐	深针孔	E124	
	631	2区 SD244	縹口	(61)	(51)	(26)			文様	○	△	△					難褐褐	深针孔	H125	
	632	2区 SD244	縹口	(58)	(56)	(33)			縋片								難72.3g		T267	
	638	2区 SD244	伊留?	(79)	(45)	(30)			縋片										T266	

※法量欄の〔〕は現存値を示している。

※出土標の「骨」は海綿骨針、「赤」は赤色粒を示す。

○・△・△は、確認できた量を相対的に示したものであり、確認されなかったものは空欄となっている。

第4表 石製品・金属製品・骨観察表

回数	番号	清標	器種	法量(mm)			直存度	色調	参考	番号	
				長	幅	厚					
29	400	4E SD210	打制石斧	(130)	66	19	基盤欠損	2.5Y5/2 薄褐色 透明白色	縫狀孔 縫合部	H27	30
401	4E W24	石斧	77	(126)	79	9	ほぼ圆形	10GY4/1 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	EE237	442
402	4E W24	大河跡	斬削石斧	(75)	52	24	基盤欠損	2.5Y5/2/1 薄褐色 深褐色	縫合部 縫合部	N2	443
403	4E W25	大河跡	斬削石斧	83	41	17	完形	10YR1/7/1 暗褐色 深褐色	縫合部 縫合部	EE238	444
404	4E W24	大河跡	石斧	72	52	42	完形	SY6/3 暗褐色 暗黃褐色	縫合部 縫合部	EE240	445
405	4E W24	大河跡	石斧	71	25	15	完形	2.5Y5/4/4 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	EE241	446
406	4E W24	大河跡	石斧	22	22	10		10GY4/1-4 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	C1	447
407	4E W24	大河跡	刀形	44	26	13		10YR1/2 暗褐色 暗黃褐色	縫合部 縫合部	EE242	448
408	4E W24	大河跡	打制石斧	(144)	69	24	刀形欠損	7.5Y5/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE241	500
409	4E W24	大河跡	打制石斧	(179)	110	31	基盤欠損	7.5Y5/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE243	501
410	4E W24	大河跡	打制石斧	(197)	102	39	刀形欠損	7.5Y5/4 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE242	593
411	4E W23	大河跡	打制石斧	(118)	53	32	刀形欠損	5YR1/4 暗褐色 暗褐色	内外縫合部分 縫合部	T304	594
412	4E W23	大河跡	石斧	30	42	9		5YR1/4 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T300	595
413	4E W23	大河跡	石斧	42	52	9		10GY4/1 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	T299	596
414	4E W23	大河跡	石斧	67	78	25		5YR1/1 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T288	597
415	4E W23	大河跡	石斧	114	72	30		7.5Y5/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T305	598
416	4E W23	大河跡	砧石?	(94)	69	17		7.5Y5/1 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T301	599
417	4E W23	大河跡	打制石斧	(160)	83	54	1/2	SY6/4 暗黃褐色 暗黃褐色	全体に縫合部 縫合部	T302	600
418	4E W23	大河跡	石核	(69)	93	42		5YR3/4 暗褐色 暗褐色	内外縫合部分 縫合部	T300	601
419	4E W23	大河跡	打制石斧	164	80	30	完形	2.5Y5/6 暗黃褐色 暗黃褐色	内外縫合部分 縫合部	T300	602
30	420	4E W32	打制石斧	(97)	60	27	基盤欠損	2.5Y5/3-3 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	F207	633
421	4E W32	大河跡	石核	126	71	52	完形	2.5Y5/3-3 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	SH18	634
422	4E W32	大河跡	石核	(324)	192	168	破損	10YR1/2 暗褐色 暗褐色	玉山形 玉山形	F187	635
423	4E W32	大河跡	石核	87	53	21		10YR1/6 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	F206	636
424	4E X21	大河跡	石核	139	72	55	完形	7.5Y5/7 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	SH47	637
425	4E X21	大河跡	石核	(76)	47	25	欠損	10YR1/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE224	638
426	4E 大河跡	石核	(56)	35	6	欠損	2.5Y5/1 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE221	639	
427	4E 中央地	大河跡	石核	108	36	39	完形	10YR1/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE222	640
428	4E 中央地	大河跡	石核	104	71	52	完形	10YR1/6 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE223	641
429	4E 南半	大河跡	砧石?	(94)	92	33	欠損	7.5Y5/4/4 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	EE228	642
430	4E 南半	大河跡	石核	(46)	25	5	欠損	10GY3/1 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	EE225	643
431	4E W23	大河跡	碧玉	26	6	6	完形	2.5GY7/1 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	Y25	644
432	4E W25	大河跡	碧玉	17	5	5	完形	7.5Y5/3 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	G20	645
433	4E W23	大河跡	碧玉	13	8	4	完形	NB 淡白色 淡白色	玉山形 玉山形	G21	646
434	4E W24	大河跡	丁子彌	(43)	(23)	(13)	破損	10GY4/1 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	A53	647
435	4E W24	大河跡	玉	42	24	12	完形	10GY1/7 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	Y24	648
436	4E W23	大河跡	玉	35	34	22	14	7.5YR1/7 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	N17	649
437	4E X21	大河跡	玉	29	17	7	完形	10GY3/1 暗褐色 暗綠褐色	縫合部 縫合部	A48	650
438	4E W23	大河跡	銅製品 刀子	(71)	198	24	4.5	7.5Y5/2/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T414	651
439	4E W23	大河跡	銅製品 刀子	(97)	(43)	6		7.5Y5/4/4 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T416	652
440	4E W23	大河跡	銅製品 刀子	(104)	17	5		7.5Y5/4/4 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T412	653
441	4E W23	大河跡	銅製品 刀子	(104)	17	5		7.5Y5/3/2 暗褐色 暗褐色	縫合部 縫合部	T411	

※法量欄の()は現存値を示している。

第4表 石製品・金属製品・骨観察表

因数	番号	通規	規格	測定(mm)			備考	測定番号
				長	幅	厚		
34	537	45-W-22	木製品 木製材	485	29	15	実形 計量規 株式会社 新日本工研	E14
	538	45-W-22	木製品 木製材	(481)	34	23	薄片7 計量規 株式会社 新日本工研	E15
	539	45-W-24	木製品 木製材	(177)	30	26	薄片 計量規 株式会社 新日本工研	E19
	540	45-W-22	木製品 木製材	194	45	13	実形 計量規 近林	S30
	541	45-W-22	木製品 木製材	(168)	95	12	薄片 計量規 桜井	T13
	542	45-W-22	木製品 木製材	(220)	66	12	薄片 計量規 桜井	T12
	543	45-W-22	木製品 木製材	(415)	121	8	基準欠陥 木製樹脂	S13
	544	45-W-22	木製品 木製材	(268)	44	17 幅45	欠陥 計量規 桜井	M5
	545	45-W-22	木製品 木製材	543	51	51	実形 計量規 佐藤木材加工用	M6
	546	45-X-21	木製品 木製材	307	(109)	75	1/2 床面樹脂 中空孔,孔径18.0mm以上	E30
35	547	45-W-24	木製品 木製材	(730)	46	46	薄片 計量規 佐藤材	S16
	548	45-W-24	木製品 木製材	(530)	47	47	薄片 計量規 佐藤材 一級品	S15
	549	45-W-24	木製品 木製材	(436)	19	15	薄片 計量規 近林	OH15
	550	45-W-25	木製品 木製材	(377)	18	15	薄片 計量規 近林	OH19
	551	45-W-25	木製品 木製材	(336)	18	16	薄片 計量規 近林	TM9
	552	45-W-25	木製品 木製材	(301)	24	22	薄片 計量規 近林	OH14
	553	45-W-25	木製品 木製材	267	24	11	実形 計量規 平内板	OH16
	554	45-W-25	木製品 木製材	(348)	53	35	薄片 計量規 近林	TM8
	555	45-W-25	木製品 木製材	(190)	15	9	薄片 計量規 先端彫	OH18
	556	45-W-25	木製品 木製材	(167)	30	8	薄片 計量規 桜井	OH19
	557	45-W-25	木製品 木製材	(226)	16	12	薄片 計量規 近林	OH19
	558	45-W-25	木製品 木製材	(166)	8	8	薄片 計量規	OH17
	559	45-W-25	木製品 木製材	(440)	131	48	欠陥 床面樹脂 容積未算出部	E33
	560	45-W-22	木製品 木製材	(149)	33	14	薄片 計量規 桜井 株式会社	N1
	561	45-W-22	木製品 木製材	153	8	8	実形 計量規 舟か	OH17
	562	45-W-22	木製品 木製材	153	10	7	実形 計量規 舟か	OH18
	563	45-W-22	木製品 木製材	146	9	8	実形 計量規 舟か	OH18
	564	45-W-22	木製品 木製材	(375)	大100 小45 幅45	145	1/2 床面樹脂 芯材	N20
	565	45-W-22	木製品 木製材	(146)	33	8	欠陥 計量規 廃工 木製樹脂	F28
	566	45-X-22	木製品 木製材	(246)	26	12	欠陥 計量規 近林	F26
	567	45-X-22	木製品 木製材	(320)	33	14	薄片 計量規 丸孔18.0mm 幅45	T5
	568	45-X-22	木製品 木製材	266	51	48	薄片 床面樹脂	T6
	569	45-W-21	木製品 木製材	88	40	43	実形 計量規 佐藤	S1
	570	45-X-22	木製品 木製材	(122)	62	56	薄片 床面樹脂 幅45	N19
	571	45-X-20	木製品 木製材	228	(228)	42	1/2 床面樹脂 幅45	F15
	572	45-X-20	木製品 木製材	(158)	23	11	薄片 計量規 遠林	F30
	573	45-X-20	木製品 木製材	(85)	105	13	薄片 床面樹脂 平内板	E16
	574	45-X-20	木製品 木製材	267	107	15	実形 床面樹脂 容積未算出部 孔径15.0mm	F29
	575	45-X-20	木製品 木製材	(146)	75	23	薄片 床面樹脂 桜井	E32
	576	45-X-20	木製品 木製材	(152)	31	6	薄片 計量規 桜井 孔径13.0mm	E31
	577	45-X-20	木製品 木製材	(365)	115	18	試用形 計量規 近林 孔径24.15mm	M14
	578	45-X-22	木製品 木製材	416	23	14	実形 計量規 近林 孔径24.15mm	F31
	579	45-X-22	木製品 木製材	162	(100)	8	薄片 計量規 桜井 孔径21.0mm 幅45	T39
36	582	3E	木製品 木製材	後板 (7)	190	測6/12	計量規 佐藤取	H01
	3E-V16	SD220	木製品 木製材	179	29	29	実形 計量規 近林	N10

第5表 木製品観察表(2)

第5章 樹種同定記録

今回報告となった柄付刀子(591: 第6表記載遺物番号3)と木製品の多又鋤(709: 第6表記載遺物番号4)について、(株)東都文化財保存研究所に樹種同定を依頼した。結果は以下のとおりである。

樹種同定結果:

1. 試料

試料は井戸枠、刀子、柄振(多又鋤)の3点(試料番号1~3)である。柄振は、身に着脱式の柄が付着しているが、木目を観察した限りでは同じ樹種と考えられたため、身についてのみ樹種同定を実施する。なお、試料番号1はPEG処理が終了した状態であった。

2. 分析方法

各木製品のうち、試料番号2の刀子は、ほぼ完形品であるが、柄の側面に柾目と板目が確認できたことから、直接切片を採取したが、木口面は加工面で切片が採取できなかった。その他の2点は、試料番号1は破損部、試料番号3は接合面を利用して木片を採取した。このうち、試料番号1は、樹種同定を行う上でPEGを除去する必要があるため、温水に浸してPEGを溶脱させた。これらの木片は、剃刀の刃を用いて3断面(木口、柾目、板目)の徒手切片を作成した。

切片は、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊藤(1992)およびwheeler他(1998)を参考にした。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にした。

3. 結果

樹種同定結果を第6表に示す。木製品は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹1種類(コナラ属コナラ亜属クヌギ節)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

第6表 木曳野遺跡群の樹種同定結果

番号	遺物番号	遺物名	樹種
1	1	井戸枠	スギ
2	3	刀子(柄)	スギ
3	4	柄振	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don)スギ科スギ属

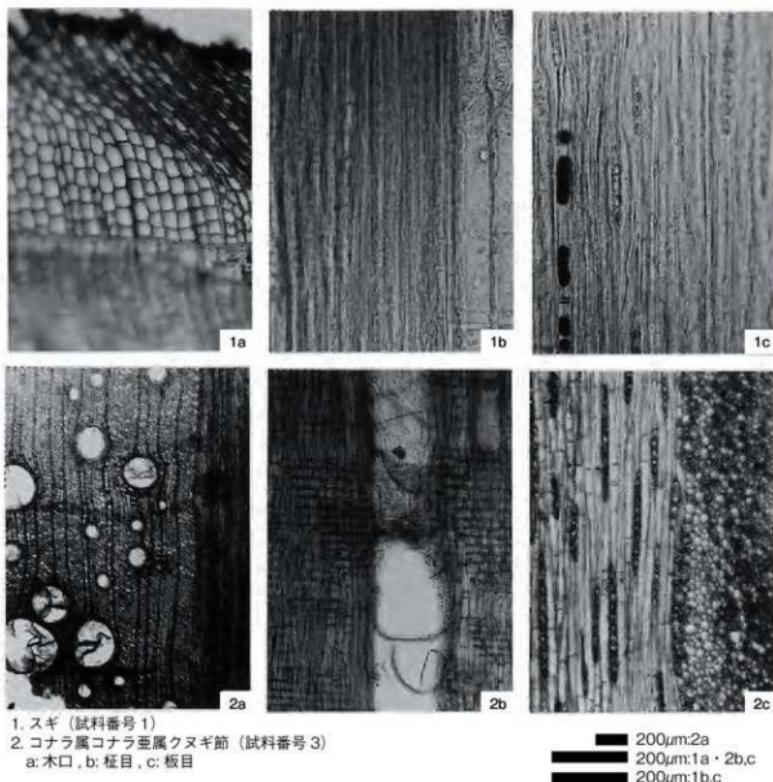
軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*)ブナ科

環孔材で、孔圈部は1~2列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で報社方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織がある。

【引用文献】

- 林 昭三 1991 「日本産木材 顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」「木材研究・資料31」京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」「木材研究・資料32」京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」「木材研究・資料33」京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」「木材研究・資料34」京都大学木質科学研究所
伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」「木材研究・資料35」京都大学木質科学研究所
島地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」地球社
Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編) 伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修) 1998
『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』海青社
(Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. 1989 *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*)



第 42 図 鶴田・寺中遺跡の木材

第6章 総括

本遺跡は金沢市の西部臨海地区に所在する縄文時代以降の複合遺跡で、石川県埋蔵文化財センターと本市埋蔵文化財センターによって広い面積が調査されており、多くの成果が上がっている。既刊書によると、本遺跡は弥生時代・古墳時代と中核的な様相を呈している。ここでは、本報告で扱った4区の遺物出土傾向について、若干の検討を試みたい。

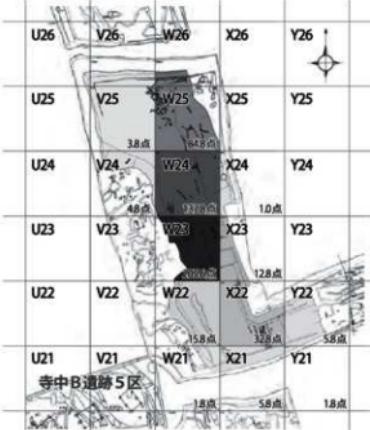
第43図は本書に掲載した大河跡出土遺物をグリッド毎に整理し、出土量の多寡をアミで示したものである。アミの色が濃い箇所ほど遺物出土量が多いことを示す。本来、該当範囲の土量によって出土量の補正を行うべきであるが、困難であったため面積での補正に留めていることを了承願いたい。

対象としたものは土器・土製品・石製品・骨・木製品で、出土地点が不明なもの、グリッド記載に誤記があると判断したものは除外した。総点数は514点となる。出土地点が「北半」「中央畦」「南半」となっているものについては、「中央畦」はW23・X23に跨る地点に設けたため案分し当該グリッドに含め、「北半」は中央畦を含む北のグリッドに案分し、「南半」は同様に南のグリッドに案分した。「W-X22」についてはW22・X22にそれぞれ案分している。出土した全遺物を対象にしているわけではなく、10mグリッドという精度からも正確な傾向を示すものではないが、概ねの傾向は把握できると考えた。

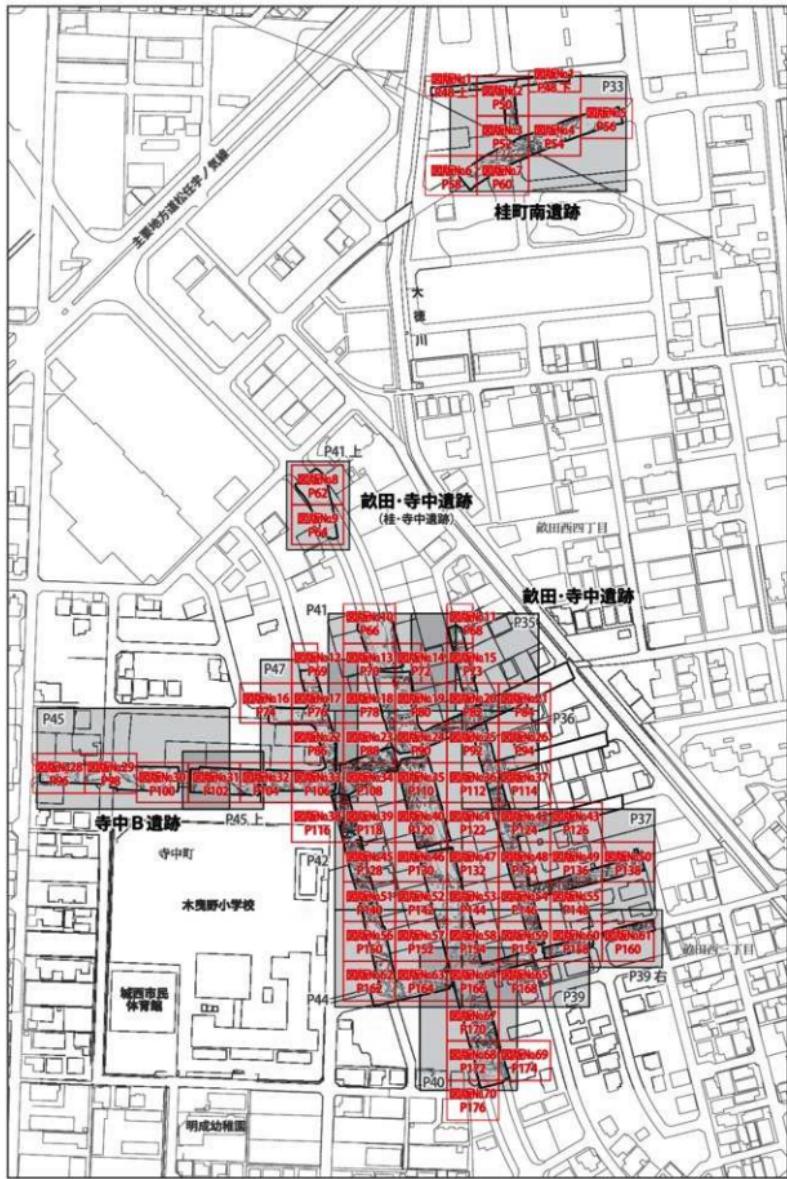
遺物の集中がみられるのはW25～W23の範囲で、W23が最も多い。次いでW24・W25の順となるが、大河跡の西岸となるV25・V24からの出土は少ない。また、W22とX22の比較では、やはり西岸からの出土は少ない傾向にある。これは発掘調査担当者の当時の見解とも一致するようである。大河跡出土遺物の大半は古墳時代前期の範疇に収まっており、調査区周辺でこの時期の遺構が確認されているのは大河跡の南西わずか15mに位置する寺中B遺跡5区（木曳野遺跡群II既報）であるが、大河跡の出土傾向と併せみると関連性が薄いように感じられる。4区大河跡出土遺物の中心を占める古墳時代前期に該当する集落は、未調査となっている4区東側に所在する可能性が考えられよう。

SD210からは11世紀～12世紀代の土師器・陶磁器が出土している。これは既報の主幹線2区SD240、主幹線3区SD222と同一の溝で、前時代の主幹線4区大河跡、既報の主幹線2区SD303・SD240・SD244、主幹線3区SD201と重複して北上する。第7図の大河跡断面図が示すように、大河跡が機能を失った後の再整備が明確である。調査前の主幹線の位置には灌漑用の主要用水が存在しており（木曳野遺跡群I第3図参照）、時代を変えても同地に流路を配置する、当該地の土地利用の一端を示す遺構といえよう。

※次ページに『木曳野遺跡群I』に掲載した1/100および1/250・1/300の航空測量図版図葉割を示した。当該書では座標が混乱しているため、『木曳野遺跡群II』から本書に至るまで、報告対象とする遺構が遺跡の中でどこに位置するかが判別しづらいと思われるため、本書第2図と併せてご活用いただければと思う。



第43図 遺物の出土傾向



第 44 図 「木曳野遺跡群Ⅰ」図葉割



調査区全景(北から撮影: 手前から4区・3区・2区)



大河跡土層断面(北東から)



SD210 土層断面(北から)



SD200



SK201 土層断面(西から)



P200 土器出土状況(西から)



SK200 土器出土状況(北西から)



大河跡 トレンチ掘削状況



大河跡 土器出土状況



大河跡 木鎌出土状況



大河跡 勾玉出土状況



SD210 鉄製刀子出土状況



作業風景



SD210出土遺物(11・13・15～17・19・20・26～29・31)



39



41



44



45・46



土錘(67～77・335)



82



85



101



102



128



129



132



137



138



143



144・146



155



157・156



縄文土器 (173 ~ 175)



181



183



193



209



231



232



233



239

255



手捏土器 (244・245・247～252・273)



237



298



小壺 (263～272・274・275)



302



303

310



326



336

341



344



346



352



349



359



372



351



376



387



357・358



369

370



388



瓦塔 (399)



結齒式豎櫛 (465)



元豐通寶・皇宋通寶 (636・637)



石器類 (417・419・411・424)



玉類 (431～437・586・594～597)



鞍 (570・571)



骨 (445～448)



鐵製刀子・銅鑷・鐵鑷 (438・439・441・634)



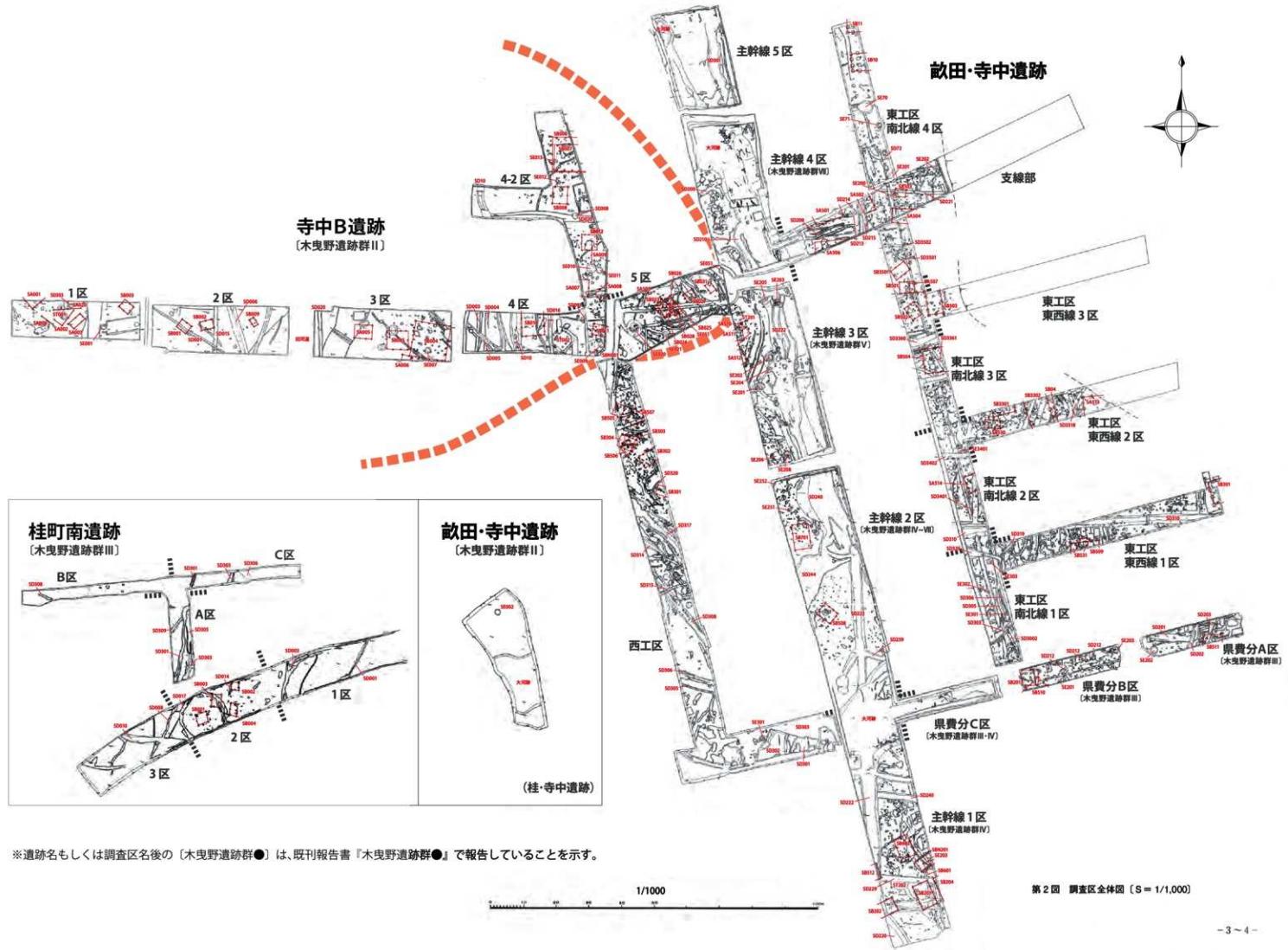
柄付刀子 (591)



多叉鉤 (709)

【引用・参考文献】

- 上原真人編 1993 「木器集成図録 近畿原始編」 奈良国立文化財研究所
- 内堀信雄 1989 「須恵器甕にみられる叩き目文について」「北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)」 北陸古代土器研究会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」「漆町遺跡Ⅰ」 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」「北陸の古代土器研究の現状と課題」 北陸古代土器研究会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 平凡社
- 向井裕知 2005 「消費遺跡での土器・陶器の組合せおよび貿易陶磁の編年 北陸」「中世窯業の諸相 資料集」「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 石川考古学研究会 1996 「石川県考古資料調査・集成事業報告書 武器・武具・馬具Ⅰ」
- 石川考古学研究会 1999 「石川県考古資料調査・集成事業報告書 農耕具」
- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 「漆町遺跡Ⅰ」
- 石川県教育委員会 2005 「金沢市歿田西遺跡群Ⅱ」
- 石川県教育委員会 2006 「金沢市歿田西遺跡群Ⅲ」
- 石川県教育委員会 2006 「金沢市歿田西遺跡群Ⅳ」
- 石川県教育委員会 2006 「金沢市歿田東遺跡群Ⅲ」
- 石川県教育委員会 2012 「小松市千代・能美遺跡」
- (財)鳥取研教育文化財団 2001 「青谷上寺地遺跡Ⅲ」
- 金沢市教育委員会 1993 「上荒屋遺跡(二)」
- 金沢市 2003 「大桑ジョウデン遺跡Ⅰ」
- 金沢市 2004 「大桑ジョウデン遺跡Ⅱ」
- 金沢市 2006 「寺中B遺跡VI 桂町南遺跡I 歿田・寺中遺跡III -木曳野遺跡群I-」
- 金沢市 2007 「寺中B遺跡VII・歿田・寺中遺跡IV -木曳野遺跡群II-」
- 金沢市 2008 「桂町南遺跡II 歿田・寺中遺跡V -木曳野遺跡群III-」
- 金沢市 2010 「歿田・寺中遺跡VI -木曳野遺跡群IV-」
- 金沢市 2010 「中屋サワ遺跡V -绳文時代編-」
- 金沢市 2012 「歿田・寺中遺跡VI -木曳野遺跡群V-」
- 金沢市 2013 「歿田・寺中遺跡VII -木曳野遺跡群VI-」
- 太宰府市教育委員会 2000 「太宰府糸坊跡XV-陶磁器分類編-」



報告書抄録

ふりがな 書名	いしかわけんかなざわし うねだ・じちゅういせき9 石川県金沢市 畠田・寺中遺跡IX							
副書名	-木曳野遺跡群-							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	金沢市文化財紀要							
シリーズ番号	293							
編著者名	景山和也							
編集機関	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)							
所在地	〒920-0374 石川県金沢市上安原町南60番地 TEL (076) 269-2451							
発行年月日	西暦2014年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	○'.''	○'.'''			
うねだ にちゅう 畠田・寺中 遺跡	いしかわけん 石川県 かねざわ 金沢市 じちゅうまち 寺中町、 うねだ にちゅうめ 畠田4丁目	172014	県01499 市029	36° 36' 33"	136° 42' 33"	20020715 ~ 20020920 20030602 ~ 20031128 20040502 ~ 20041029	約13,760m ²	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
畠田・寺中 遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・ 奈良・平安・鎌倉・ 室町	建物、井戸、 土坑、溝、川		土師器・須恵器、 陶磁器、石製品、 木製品、金属製品	川跡から古墳時代 の土器・木器が多 数出土		
要約	木曳野遺跡群Ⅷで報告した古墳時代・奈良・平安時代の河川跡の続きやその他の遺構の報告を行った。主幹線4区は古墳時代前期～中期の河川跡が中心で、その他平安時代末から鎌倉時代の溝がみつかっている。							

石川県 金沢市
畠田・寺中遺跡IX
 -木曳野遺跡群Ⅷ-
 (『金沢市文化財紀要』293)

発行日 平成26(2014)年3月28日
 発行者 金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
 〒920-0374 石川県金沢市上安原町南60
 TEL (076) 269-2451

印 刷 株式会社 栄光プリント